

韓流の進化／深化と日韓関係

はじめに

二一世紀に入って日韓関係を論じる際に、これまでは分析の対象とはならなかった「文化」の側面の比重が高まっている。二〇世紀には想像すらできなかった「韓流」と「日流」という文化現象により、今では文化を抜きに日韓関係を論じることは難しい状況になった。韓流は一期、「寒流」と揶揄されることもあったが、韓国時代劇とK-POPブームにより日本の文化シーンのなかに定着し、さらに拡大・深化している。

当初は、「冬のソナタ」や「ヨン様」などブームの原因を説明する社会学的、メディア学的議論が多かったが、

近年になり、韓流（および日流）が日韓関係にどのような影響を与えるのか、K-POPに代表される「新韓流」が日韓関係を変えうるのか、どのような外交的含意があるのかなどについてより関心が高まってきた。筆者は二〇一〇年、『韓流』と「日流」―文化から読み解く日韓新時代』という拙著を通じて、文化交流を日韓関係の文脈から検討した。それを受け二〇一一年秋に、一般市民向けのシンポジウムとフォーラムで報告する機会を得た。本稿はその際の報告内容を基に、韓流と日韓関係について考えるものである。本稿では、拙著の公刊以降に顕著となったK-POPを中心とする「新韓流」を分析の中心に据えるとともに、「韓流」に対する認識のあり方や、日韓の相互認識の断面、日韓関係の質的変化、そして、文化交流

権クオン 容ヨンソク 爽

を日韓関係の進展に活かしていく方策など、より実践的な課題の方に焦点を当てて論じていきたい。

まず、韓流をめぐる様々な言説・視線について整理しておこう。韓流に対するまなざしは、雑駁であるが大きく「国家／民族主義的観点」と「インターナショナル／トランスナショナルな観点」に、分類することができる。

「国家／民族主義的観点」には、まず、韓国側の「文化優越主義」に基づくナショナルリズムの欲求がある。韓国のメディアでよく「日本列島が韓流に熱狂」といった誇張された表現が散見されるが、事実在即しているとはいえない。そこには「対日コンプレックス」の裏返しとして、「克日」の象徴として韓流を捉えようとする見方が介在している。次に、「文化外交」論的視角である。これは韓流スターを「文化外交官」と称し、「未来志向」、「日韓友好」というスローガンの下に懸案を棚上げにしつつ、ナショナルな枠を前提とした「国際文化交流」の延長線上に韓流を捉える視点である。そして、日本側に顕著な見方として、韓国の国家戦略・世界戦略（あるいは「対日工作」という見方もある）として韓流を捉えるまなざしである。そこでは、近年躍進する韓国企業と韓流を関

連付けて考える傾向が強い。FLOPグループは、国策によって養成された「国家代表」であり、世界マーケットをターゲットにした「輸出商品」であるとされ、経済効果のための「先兵」であり「戦士」であるとされる⁶⁾。最後に、韓流批判論／「嫌韓流」の観点である。韓流ブームなど存在せず、実体を伴わない「バブル」であると、あからさまに反対・拒否する立場である。

「インターナショナル／トランスナショナルな観点」には、第一に、政治・外交的關係と文化を切り離し、文化の役割を限定的に評価する立場がある。ポップカルチャーに誇大な期待をかけることを戒め、政治、歴史認識問題、領土問題など日韓の懸案の解決にはならないことを強調する。そこには文化資本に対する批判と韓流（文化）の政治性に着目する観点が介在する⁷⁾。次に、「東アジア共同体」といった地域主義のコンテクストからの言説である。韓国でよく議論される（東アジア）「文化共同体」という議論もこの範疇に含まれる。そして、韓流の構造的要因や雑種性などに注目し、既存の文化／階層秩序に対する「反乱」・「抵抗」というコンテクストからより積極的に捉えようとする観点がある⁸⁾。また、日本の「主

体化」という観点から韓流を捉える視点もある。最後に、無関心派が挙げられる。脱政治／歴史／日韓関係志向であり、規範的議論に関心がなく趣味として韓流を消費する立場である。

このような見方の相違は、日韓関係をどう捉え、その目標をどう設定するかによって生じる。日韓関係において歴史認識問題、領土問題、国民感情の問題を最優先に捉える立場からは、現在の文化現象はそれらの「解決」手段になりえないということになる。また、既存の日韓の「国家間関係」の進展に重きをおくならば、懸案の棚上げ・先送りを通じて、日韓FTA、日韓防衛協力（日韓同盟論）、米国との同盟強化と対北朝鮮圧迫姿勢といった「価値観外交」、「日韓友好」論が力を増し、文化はそれに資するとされるだろう。一方、日韓関係を多元的に捉え、人・モノ・文化の移動に注目し、関心、親近感という認識・文化的関係の側面も重視するならば、日韓関係はすでに大きな変化の渦の中にあり、今後も新たな地平を切り開く可能性を秘めていると評価できよう。さらに、究極的には「真の和解」を通じた対等でリベラルで成熟した関係を目指し、自らの国、社会、個人の改革・進歩の

ための日韓関係という規範的観点からすれば、文化交流のあり方にもさらなる課題が設定され、文化交流は「文化外交」の域を超えて、次なるステージへと移行する必要性を感じるようになるだろう。

日韓関係は世界にも稀な特殊な二国間関係である。歴史的、文化的、地理的、政治・経済的に極めて密接な関係にありながら、韓国では日本や日本文化が好きと公言できない雰囲気があり、日本には『嫌韓流』という本がベストセラーになる土壤がある。いわば、「反日」と「嫌韓」の奇妙な共生関係を抱えながらも、未曾有の越境する文化の氾濫という「反乱」も体験している。もちろんその根源には、日本が韓国を植民地支配したという歴史的事実がある。この植民地支配については、イギリスがインドではなく、隣のフランスあるいはスペインを支配したと仮定する想像力が必要であるといえよう。（もちろん、インドの植民地支配が正当化されるという意味ではない。）近現代の日韓関係はこれまで「非対称性」と「不均衡」を基底に、「相互軽視／蔑視」のパラダイムの中で推移してきた。しかも、経済・産業やスポーツなどにおいて得意分野が重なり、常に「競合関係」にあった。よって、日本にとって韓国は前途に立

ちはだかる「赤い壁」、「宿敵」であり、日本の「お株」を奪い、「お家芸」に挑戦する少し憎たらしい存在に見えることも往々にしてある。国内に本質主義者、排他的ナショナリズムの存在を抱えながらも、一方で無限の共感と協力と提携の可能性を有する両国は、上記のような特殊な関係であるとの認識の下、通常の二国間関係とは違う慎重で重層的なアプローチが必要であるといえよう。このような関係であるからこそ、お互いの文化に触れることは、単なる文化の消費行為に止まらず、タブーへの挑戦、既存の枠組みに対する抵抗、反乱、変革への志向性を帯びることになり、また、互いの真実が隠蔽されがちな構図の下では、「正義」の問題でもあるといえる。ここに、韓流や日流など文化交流と日韓関係を語る意義があるのである。

一・韓流の進化／深化／グローバル化

——「新韓流」の時代へ

韓流は、第一義的には韓国発のエンターテインメント・コンテンツ、スターなど韓国のポップカルチャーに対する熱狂・ブームのことを指す。それがグルメ、エステ、

コスメといった美容、健康法などに対する関心へと拡大している。だが、韓流はこのような文化産業・商品の枠に止まらない。ある国の文化や商品が持続的な人気を得るためには、その国に対する肯定的なイメージの普及が前提条件となる。その意味で韓流の背景には、民主化後の韓国の躍進のダイナミズムがあるとみるべきである。よって韓流を、ポップカルチャーのみならず、スポーツ、経済、政治、市民社会などあらゆる分野における韓国の躍進やその様式・文化に対する総称として包括的に捉えたい。実際、日本のメディアは韓国のスポーツ選手について、「韓流ストライカー」、「韓流大砲」という表現を用い⁵⁾、社会・政治面においても「韓流教育」、「韓流民主主義」という表現も使われている。韓国ドラマやスター、**POP**それ自体の魅力だけではなく、朴智星、イ・スンヨプ、キム・ヨナなどスポーツ選手に対する注目、サムスン、現代、LGなどの大企業ブランド、IT/デジタル革命・グローバル化への対応といった韓国の強みと新しさに対する認識が根底に広がっているからこそ、韓流は一過性のブームとして終息することなく、ジャンルとして定着し互いに相乗効果をもたらしているといえる。

周知のとおり、韓流は『シユリ』、『ISA』といった韓国映画への注目から始まり、ドラマ『冬のソナタ』と「ヨン様」ブームによって開花した。その後は恋愛ドラマと男性俳優によって牽引され、中高年女性のマニア文化として位置づけられた。続いて『チャングムの誓い』、『朱蒙(チュモン)』などの時代劇がブームとなり、『イ・サン』、『トンイ』など完全に定着している。そして二〇一〇年からは、KARAや少女時代が日本デビューを果たし、空前のK-POPブームが巻き起こり、「新韓流」の時代に入っている⁶⁾。

K-POPブームは初期の韓流同様、人々の予想を遥かに超えるものであった。二〇一〇年八月二五日、東京有明コロシアムで開催された少女時代のショーケースイベントでは、二万二〇〇〇人のファンが殺到した。会場には若い女性で溢れ、「韓流Ⅱ中高年女性」という固定観念を打ち破った。NHKが九時のニュースでトップ記事として扱い、各民放も競ってこのイベントの模様を報じた。九月二日には、少女時代のDVD『New Beginning of Girls Generation』がオリコン・デイリーチャート一位に輝くなど、その後K-POPグループが様々な記録を塗り替えている。

カラオケの大手メーカー・第一興商は、二〇一一年末のテレビ・コマーシャルにおいて、アーティストの映像と共に歌えることを売りにしていたが、モデルに採用したのはK-POPグループの2NE1であった。カラオケの宣伝でK-POPが用いられること自体、画期的であるといえるが、それだけカラオケでK-POPが歌われていることの証左であるともいえよう。K-POPへの関心は二〇一一年秋の「日韓おまつり」の際に、東京でK-POPコンテストが開催されたことにも示されている。歌への関心は自然と言葉への関心へとつながる。参加者の男性は、「サランヘヨ(愛してる)」という響きにより深い意味合いを感じるかと答えている⁷⁾。また、筆者の大学生に対する聞き取り調査によると、K-POPグループ・Super Juniorのメンバーがパーソナリティを務めるラジオ番組「슈키라(シュキラ)」までインターネットを通じて視聴しているという。この番組はラジオだが映像も一緒に流れる方式をとっているため、言葉の意味がわからなくても、スターの身振り手振りとその雰囲気を楽しんでいるという。筆者はかつて、八〇年代のソウルで、時より越境してくる日本の深夜ラジオの電波をキャッチしては聴いていたのだが、今や、日本の若者

が韓国のラジオ番組を普通に楽しむ時代になったのである。また、動画サイトを通じて、韓国の人気バラエティ番組「청춘불패(チヨンチュンプルペ、青春不敗)」、「왕심장(カンシムジャン、強心臓)」などまで楽しんでいるという。

KARA、少女時代といったガールズ・グループに加えて、チャン・グンソクの存在は、「新韓流」を象徴しているといえる。チャン・グンソクは、既存の韓流に対する定式化された認識を拒否する存在である。すなわち、韓流スターのイメージとされる「誠実な貴公子」でも、「腹筋」を見せつける「マッコヨ」タイプでもない。ルックスは色白で中性的魅力があるのに、「俺様」キャラクターでカリスマぶりも発揮する意外性をもっている。韓国のスターが日本という舞台で「いい子」ぶることなく、これほどまでに伸び伸びとありのままの姿を見せられることは、ある意味革命的であるともいえる。その上に演技力とアーティストとしての才能とスター性も兼ね備えている。しかも、後述のように震災の際に積極的に援助の手を差し伸べるなど、多面的な要素を併せ持っている。このようなチャン・グンソクはエステティック⁸⁾のモデルに採用

されるなど、ヨン様とは違って世代を超えた同代的な人気を博している。筆者は日本の方から「チャン・グンソクに会いたいから韓国に行きたい」という話を何度も耳にした。チャン・グンソクは、もはや韓流スターを「モダン」と称することを不可能にする存在でもある。

韓流の深化は後述するように、人の移動の増加にも顕著に表れている。韓流という文化体験が、韓国への渡航の増加を促しているわけだが、近年には旅行形態も多様化している。八〇年代まで日本人の韓国旅行といえは、男性によるいわゆる「キーセン観光」が主流をなし、九〇年代は「ソウル二泊三日焼き肉・アカスリツアー」が一般的だった。ここでは、快楽と消費の対象としての韓国であって、文化や歴史に触れるケースは稀だった。ところが、二〇〇〇年代に入り初期韓流の時期には、主に中高年女性による「冬ソナツアー」など、文字通りの「韓流旅行」が一般的となった。これが進化する形で、母と娘が一緒に行く旅行が増え、その後は家族旅行、時には三代が共に旅行する「大家族旅行」や家族同士での「家族団体旅行」も増えた。また女性の「一人旅」が増加しているという報道もあり⁹⁾、留学や長期滞在型も増え、震

災後には釜山などに別荘を買う日本人もいる。旅行も時代劇の影響を受け、慶州をはじめ『イ・サン』の舞台となる水原など、ソウル郊外および地方にまで足を延ばす場合が増えている⁹⁾。

このような旅行形態の多様化・進化には女性誌の役割が少なくない。例えば、『PRAU』（講談社）二〇一一年三月号は、「まだまだ、韓国」という特集を組み、数十頁にわたって韓国の魅力と楽しみ方を詳細に紹介している。上戸彩や内山理名などの女優の具体的な韓国旅行体験や、現地の人も知らないような穴場スポットまで紹介する。普通の韓国人よりもソウルに詳しい日本人がいてもおかしくない時代になったのである。ところで、この「まだまだ、韓国」というタイトルから日本の対韓認識の一端を垣間見ることができる。「まだまだ、イギリス」、「まだまだ、フランス」というタイトルは目にしたことがない。そこには、女性誌において韓国が近年注目され続けたことを示すとともに、韓国を「また」特集することに對する日本社会のバリアの意識が垣間見られる一方、まだまだ韓国に注目する理由がある、韓国の無尽蔵の魅力について語るための「つなぎ」の表現としての機能も果たし

ている。

また、東京・新宿大久保のコリアンタウンは「観光地」と化した¹⁰⁾。普通の女の子がトッポキやホットクを頬張り、サムギョプサル店の前に行列ができる。韓国旅行体験者が韓国料理と食材、韓流関連グッズと「プチソウル」的な雰囲気求めて全国から集まっている。皮肉にも大久保のコリアンタウンに「コリアン」の居場所は少なくなっている。かつては、韓国人のための望郷の街だったが、いまや日本人による「ジャパニーズ・コリアンタウン」になっている。韓国時代劇により韓国語および朝鮮半島の歴史への関心も高まり、関連ムックや朝鮮の歴史に関する入門書がベストセラーになり、韓国の人気歴史家である李徳一^{イ・ドギル}の『イ・サンの夢見た世界―正祖の政治と哲学』（キネマ旬報社）も翻訳された。また、韓国を代表する作家である申京淑^{シン・ギョンスク}の『母をお願ひ』（岩波書店）も翻訳された。その規模はまだ微々たるものかもしれないが、韓流は確実に進化・深化しているといえよう。

「新韓流」は日本のみならずグローバルにも展開している。シンガポールのCDショップの売り上げ上位を占めているのは、ほとんどK-POPといっても過言ではない。他の

東南アジア地域でもK-POPや韓流の人気は、現時点では不動のものである。台湾では規制が行われるほどである。そして韓流は中央アジアはもちろん中東・アフリカ・南米へも拡散し、北朝鮮にも浸透している⁽¹⁾。注目すべきは、まだ一部とはいえ欧米でもK-POPに関心が注がれていることである。二〇一一年六月パリで、少女時代などSMエンターテインメント所属のアイドルによるライブ「SM TOWN IN PARIS」が開催され、大盛況となった。ニューヨークでもライブが行われ、『Daily News』（二〇一一年一〇月二三日付）は、“attack of the K-POP stars”というタイトルの特集を組んだ。ロンドンにおいても、初のK-POP単独ライブが開催された。K-POPの力は、韓国文化放送（MBC）のオーディション番組「위대한 탄생（偉大な誕生）」⁽²⁾にも示されている。ここでは、欧米、南米、日本、アジアなど、K-POPアーティストになることを夢見る人たちにやるグローバル・オーディションが行われた。韓流をめぐる「隔世の感」は日本だけでなく、欧米でも見られる現象である。韓国語を学ぶイギリス人が現れ、ロンドンの韓国レストランに行列ができる時代が来るとは、既存の認識枠組みでは説明がつかない現象である。

筆者は二〇一一年三月、バルセロナにあるCASA ASIA (<http://www.casasia.es/>) というスペインとアジアとの文化交流を推進する機関の職員にインタビューを試みた。その職員いわく、日本語を勉強し、日本のアニメやJ-POPに関心があったのだが、最近では韓流ファンで韓国語を勉強していると答えてくれた。きっかけは、日本のポップカルチャーを紹介するインターネットサイトで、東方神起など日本デビューした日本語で歌うK-POPアーティストが紹介されるようになり、徐々にK-POPに関心を持つようになり、自然とドラマも韓流ドラマを好むようになったという。また、バルセロナでも一定の若者が韓流を楽しんでおり韓流関連グッズを販売する店もあると教えてくれた。ポルドー大学のホン・ソッキョン教授は、フランスにおける韓流は、すでにグローバル・コンテンツとなった日本のマンガ・アニメ文化に起因していると述べたが、ヨーロッパにおいて、日本文化（J-culture）から韓流（K-culture）へ拡大していく「一つのパターン」を確認することができた。YOU TUBEを運営するGOOGLEは、二〇一一年一月六日より、韓国語の動画に自動でハンガル字幕が示され、それを瞬時に外国語に翻訳するサー

ピスの提供を始めた⁽¹⁴⁾。これにより、韓流のグローバル化はさらに拡大する可能性がある。また、K-POPや韓国ドラマなど韓流に興じている一〇代の娘を持つ、フランスの父親の話から韓流の普遍性を感じ取ることができる。彼は、韓国のスターは礼儀正しく身なりもきちんとしており、ドラマも健全な内容であるので安心して見ていられるというのだ⁽¹⁵⁾。また、フランスの韓国文化同好会である「コリアンコネクション」副会長であるカブリン・ブレイは、韓国のドラマには、フランスでは失われてしまった価値、例えば、両親と祖父母を常に尊敬し家族が絆で結ばれるといった情緒があるとした⁽¹⁶⁾。韓流は日本および先進国で失われつつある「ホーム文化」の再建の可能性を秘めているともいえよう。

以上のように「新韓流」の特徴は、中毒性と持続性の高い音楽への波及などジャンルの拡大、文化消費を主導してきた若い女性への波及、韓流のプラス・イメージへの転換、グローバル化の四点に要約できよう。その結果、新韓流は同時代性（共時性）と同世代性、普遍性を獲得した。以前は韓国で人気のドラマが数年遅れて日本に紹介される時差があった。また、「冬ソナ」に象徴されるよ

うに中高年女性を中心に、「古き良き時代」に対するノスタルジーをベースにしていた。だが、今の音楽などは字幕作業も不要なためその転換力がスピーディになった。日本のリスナーは韓国の若者たちの今の感性にリアルタイムで共感している。この若者の同時代的共感、今後の日韓関係を考える上で軽視できない。また、インターネットを通じて、グローバルに普及していることは、「アジア性」を超え普遍性を獲得しつつあるといえよう。

二. 韓流／新韓流の源泉と「文化主体」としての韓国

ジョージタウン大学教授のヴィクター・チャ (Victor D. Cha) は、二〇一一年七月のソウルでの「海外韓国学教授記者懇談会」において、「世界のいかなるミドル・クラス国家も、韓国のように自分のウェイト（重量級）以上のパンチをかます文化を持っている場合はない。このような韓流は学問的に研究する必要がある」と述べた⁽¹⁷⁾。韓流の源泉となった文化主体としての韓国の底力とは何か？この点についての理解がなければ、韓流は韓国の国

策でバブルにすぎないという見方の再生産につながる
いえよう。では、韓流が二〇世紀末から飛躍的に隆盛し
た背景から整理してみよう。

第一に、金大中政権の文化振興策と「文化外交」を挙
げることができる。七〇年代後半、日本の大平正芳首相
が「文化の時代」を標榜し⁽¹⁸⁾、「文化」を政権運営のキー
ワードに据えたように、九〇年代後半の金大中政権も「文
化」を世紀末および二二世紀の韓国のキーワードに設定
し、「文化立国」を目指した⁽¹⁹⁾。文化観光部（現在は文化
体育観光部）が発足し、従来の「交通部」の傘下にあつ
た「観光」を文化と結びつけ、「文化振興法」も制定され
た。金大中政権の文化政策を、単に「輸出」という経済
効果の文脈でのみ捉えることは、あまりに矮小化するも
のである。金大中大統領は、文化それ自体だけでなく、
北朝鮮に対する太陽政策を展開し、日中韓首脳会談、東
アジア共同体を公式に提唱するなど、東北アジア／東ア
ジアの地域主義を目指し、安全保障や経済関係だけでは
ない、和解を通じて心と心が通い合う平和的で「文化的」
な国際関係を標榜したといえる。実際、船橋洋一が金大
統領の訪日の際に「対日太陽政策」と評したように⁽²⁰⁾、金

大中は日本大衆文化の開放に踏み切り、「天皇」という呼
称の容認と「戦後日本」に対する肯定的な評価など、「未
来志向」の日韓関係を標榜した。金大中政権の「文化外
交」は、韓国の国益（分断体制の克服）と地域益（東ア
ジア地域協力）とが重なるパラダイムを創出することに
成功したと評価できよう。

第二は、韓流は階層的世界秩序に対する韓国人のルサ
ンチマン（恨）と、「世界の中心」へのパッション（熱望）
の表出であるという側面である。ブルース・カミングス
が、植民地期の朝鮮半島を「蝕」の時代として巧みに表
現しているように⁽²¹⁾、朝鮮・コリアは、世界史の中でその
存在を認知されることなく、長い間中国の属国で、近代
は日本の植民地で、戦後は朝鮮戦争と悲劇の分断国家、
独裁体制という受動的で否定的なイメージが定着してき
た。また、文化・文明的にけっして劣ると思わなかった、
あるいは、かつては「先生」として文化・文明を伝授し
たはずの日本の植民地になったことは、韓国人のプライ
ドを大いに傷つけた。それゆえ近代化に成功し、敗戦か
らも直ちに復興し、文化的にも先進国になっていく隣国
日本の存在は、韓国人に「文化的コンプレックス」を抱

かせるのに十分であった。欧米の人気アーティストがお隣の日本ではライブを何度も開催するのに、韓国には一度も来ることがなかったことも、韓国人の階層的経済秩序と文化秩序に対するルサンチマンを増幅させた。

このように韓流の根底には、今なお「分断時代」を生きた韓国人の屈辱の近現代史からの脱却への「あがき」という側面があるといえる。「世界」に認められたい、「世界」の中心に参入したいという、階層的文化秩序における上昇志向性がモチベーションになっている。そこで準拠となる存在が日本である。日本の成功をモデルとし、「追いつけ追い越せ」というキャッチ・アップをスローガンにした。国家ブランド力の低い韓国のスターが、世界あるいは日本で認められるためには、同じやり方とレベルでは通用しない。まさに「先進国」から「国家戦略」、「輸出商品」、「過酷な競争システム」と揶揄される「練習生方式」を取らざるをえなかったのである。いわば、先祖の「華麗なる遺産」を相続できなかった韓国の若者は、自分たちで道を切り開くしかなく、幼い頃から青春を捧げてまでも練習生の身分として、歌とダンスと外国語の習得に熱心にならざるをえなかったのである。その努力

がインターネットという時代の恩恵と共に結実したのが、近年のK-POPの躍進といえる。彼らは欧米および日本のポップミュージックに憧れ、それを徹底的に研究し不断の努力によって、そのお株を奪うパフォーマンズができるようになった。その達成感・快感がエネルギーになっている。

第三に、これと関連して韓流には韓国の「文化的ゴールデン・エイジ」と、「W杯世代」のコラボレーションによる、「過去の自分」の克服・脱皮のダイナミズムがあるといえる。「文化的ゴールデン・エイジ」とは、韓国民主化の中心世代といわれる「三八六世代」およびその直後の世代であり、激動の八〇年代に青春時代を過ごし、貧困および社会的矛盾とそれを克服する民主化と経済成長のダイナミズムを体得し、文化への渴望とその吸収に貪欲だった世代である。現在のK-POPを主導するプロデューサーのイ・スマン(SMエンターテインメント)、ヤン・ヒョンソク(YGエンターテインメント)、パク・ジニョン(CJエンターテインメント)など多くがこの世代である。彼らは韓国が民主化され「世界化」が進むなか、世界の文化をいち早く取り入れ、韓国のポップカルチャーに

第一次「革命」をもたらした世代でもある。だが、アーティストとしての彼らは「世界基準」にはほど遠く、同時代の日本の音楽シーンとも比較にならないレベルだった。だがアイデアと感性を合わせた彼らが、今度はプロデューサーとして「W杯世代」とタッグを組んだのである。

「W杯世代」とは、韓国躍進の契機となったソウル・オリンピックの前後に生まれ、二〇〇二年サッカー・ワールドカップ（以下、W杯）を多感な一〇代の時に体験した世代を意味する。彼らは年々成長し自由化する韓国社会と共に成長し、W杯ベスト四という二〇世紀の韓国の歴史からは想像もつかない快挙を目の当たりにしながら、「自分たちにもできる」、「世界で通用する」という自信を内面化した「第二のゴールデン・エイジ」に育っていた。サッカーのほかにもPSGのパク・セリ、メジャーリーガーのパク・チャンホなど従来の韓国人の殻を破ったアスリートに勇気づけられ、その後、女子フィギュア・スケートのキム・ヨナや競泳のパク・テファン、サッカーのイ・チョンヨンなど世界の舞台でひるまず、負けない軽やかな世代が続々と誕生し、互いに相乗効果

をもたらしている。これらスポーツでの活躍、グローバル企業の躍進、「技術とインターネット・インフラの整備」などの新たな潮流と呼応しながら、「W杯世代」は「아이디올」を中心とした韓流の主役になったといえる。

新旧の「ゴールデン・エイジ」のコラボレーションを象徴する例には、少女時代の人気を不動にした「少女時代」という楽曲がある。この曲は初期の「ゴールデン・エイジ」の代表的シンガーであるイ・スン Chol の曲のカバーであるが、冴えなかった原曲が二〇〇七年の少女時代のバージョンでは、見事に洗練されたアレンジと多彩で力強いボーカルと共に華麗に生まれ変わった。また、八〇年代を代表するイ・ムンセの「붉은 노을（赤い夕焼け）」が、BIG BANG (YG) によって、世界基準のまったくの新しい楽曲に仕上がったことも一例である。これらはポップシーンにおける世代間の垣根をなくすとともに、過去の姿を見事に克服したという意味で、韓国人としての「手応え」を感じる契機になっているといえる。いわば新旧の「ゴールデン・エイジ」のコラボレーションは、(韓国人の力量を正当に評価してくれなかった) 既存の階層的文化秩序に対する痛快な「リベンジ」、あるいは「恩返し」

であるといえよう。

第四は、韓流におけるハイブリディティ性である。K-POPはもはや「韓国の歌謡」ではない。欧米のポップミュージックとJ-POPを融合させ、そこに「コリアン・ヤンニョム（テイスト）」をアレンジして、親近感の中にオリジナリティを生み出すことに成功している。欧米の「本格派志向」と日本の「カワイイ文化」と韓国らしさや情緒を盛り込んだ、少女時代の「Gee」、T-ARAの「Roly Poly」などやSuper Junior、BIG BANG、2NE1のサウンドおよびパフォーマンスは、K-POPが新たな「世界基準」を創出したことを象徴している。K-POPの場合、メンバーも帰国子女や在米コリアンをはじめ外国人もメンバーに加え、トランスナショナル化しており、フュージョンとハイブリディティを通じて「韓流グローバル・スタンダード」を創出し、それが普遍性を獲得できている。タイの音楽プロデューサーであるグレンの、「K-POPは私達が望んできたスタイルそのものです。セクシーだけど猥褻的ではなく、西欧的だけどアジアのスタイルを捨てていない」という言葉に示されている。⁽²³⁾

最後に、文化主体としての韓国の魅力と可能性は、韓

流に注目する当為性を付与する。韓国ほど激動の現代史を駆け抜け、ドラマチックな歴史展開を見せてきた国や民族も珍しいのではないだろうか。韓国は植民地体験と朝鮮戦争を経て、分断体制の下で、四・一九学生革命、五・一八光州民衆抗争、六月抗争などを通じて独裁政権を打破し民主化を勝ち取り、その過程で文学や文化も開花させた歴史をもつ。また、「漢江の奇跡」と呼ばれる経済成長を達成し、グローバル化へも積極的に対応し、被援助国から援助国へと転身した。民主化後は、太陽政策や東アジア地域主義の提唱など、分断体制の克服と新しい東アジア国際秩序の創生のために努め、政権交代や様々な改革を通じて政治はダイナミズムを有している。そして二一世紀には、民主化と経済成長で蓄積した力量を文化やスポーツ・芸術分野で開花させるとともに、「デジタル・デモクラシー」や「ろうそく集会」などの「広場文化」、「ナコムス(나꼼수)」などのSNSを駆使した代案言論の模索など市民社会の活力は注目に値する。

このような「新韓国」のダイナミズムの果実の一つが「韓流」である、という認識に立つことが必要ではないだろうか。このダイナミズムからパク・チャヌク、ポン

・ジュノ、イ・チャンドン、キム・キドク、イ・ピョン
フンらの娯楽性と社会性と芸術性を兼ね備えた世界的に注
目される巨匠が誕生し、ドラマでも「모래시계(砂時計)」、
「チャングムの誓い」、「イ・サン」、「자이언트(ジャイ
アント)」、「サイン」といった秀作が誕生している。激動
の現代史体験により、今の作り手および役者・歌手一人
一人に「ドラマ」があることが、韓流のクオリティにつ
ながっていると考えられる。もちろん、これは韓国だけ
が特別であるということの意味しない。韓国がよきモデ
ルを提示することで、その他のポストコロナリアル国家や、
あらゆるマイノリティ・底辺の側からのカウンターカル
チャーとしての文化の隆盛を期待できるのである。この
「新韓国Ⅱネオコリア」のダイナミズムを隣国の日本が
注目しないままではいいのだろうか？この文化主体として
の韓国の可能性に注目することなく、「美脚」、「腹筋」、「一
糸乱れぬダンス」だけに目を奪われることになれば、韓
流を通じた日韓関係の成熟も遙遠なものになるだろう。

もちろん、韓国・韓国人もまた歴史的存在であるので
変化・変質は避けられない。だが、これからの韓国が、
建設、消費、管理という「3C(construction, consumptio

n, control)」を基盤とする「空虚な楽園」⁽²⁵⁾としての「も
う一つの戦後日本」になるのか、あるいは「近代を超克
する代案モデル」または「二一世紀型ミドルパワー・モ
デル」を提示できるのかは、韓国人の自覚と力量にかか
っており、先に歩を進めた日本との提携・対話は必要不
可欠であるといえよう。

この節のまとめとして、韓流の歴史的意義について触
れておきたい。韓国にとって韓流の意味は、ようやく正
式に「世界の一員」なれ、しかも主要な役割を果たせる
かもしれないという手応えを得たことである。韓国人は
ようやく世界／歴史に対するルサンチマンから解放され、
「国際的なナシヨナリズム」を持つ契機を与えられた
といえるのである。韓流の世界史意義は、植民地支配、
戦争、軍事独裁を経験し、極貧国であった韓国という小
さな分断国家の文化が、アジアだけでなく、これまでの
歴史ではつながることがほとんどなかった南米・中東・
アフリカといった遠方地域、そして、日本、欧米といっ
た「文化先進国」にまで波及し、普遍性を獲得したとい
う点にある。これは単に韓国の経済的利益やナシヨナリ
ズムを満たす次元の問題ではなく、既存の階層的文化秩

序に対する反乱・抵抗であり、その揺らぎと再編が試みられているという文脈で捉えてもいいのではないだろうか。ここに、「革命」としての韓流の歴史的意義がある。

また、文化主体としての韓国の登場は、従来の文化面での欧米偏重の傾向を是正し、「アジアのアジア化」を促す契機になるといえる。いわば、「他者化」されたアジアが文化を通じて「主体化」することで、⁽⁶⁾アジアの文化地形はさらに豊かになるといえよう。

三、韓流と日本社会

韓流は二一世紀の日本社会における注目すべき社会現象といえる。これまで想像もできなかったある現象が一年以上も持続するのは、何らかの構造的要因があると考えられる。この節では、日本社会において韓流が起きた要因について考察するとともに、日本側の韓流に対するまなざしと韓国に対する親近感の推移についてみたい。

第一に、韓流はマクロな観点からみれば、日韓を含めた東アジア国際秩序の構造的変動と関係している。八〇年代の韓国を記憶する人からすれば今の韓国は別の国の

ように思えるだろう。それほど韓国はこの二〇数年の間、是非はともかくめまぐるしく変貌を遂げきた。八〇年代後半、政治的民主化を達成した韓国は、冷戦の終焉に伴い「脱分断体制」へのダイナミズムが生まれるとともに、グローバル化（金泳三政権の際には「世界化」^{セケフア}）に対応してきた。新しい世界への希求からポジティブに自らのあり方を改変してきた（あるいは改変せざるをえなかった）。また、二〇世紀後半の韓国ほど「忙しい」社会も珍しいのではないだろうか。脱植民地化と「圧縮成長」と急速な近代化・都市化のダイナミズムに身をおいてきた韓国人の「体内時計」は速いといえる。常に新しいものが誕生しては消え、また生まれるというサイクルがとても早いのが韓国社会の特徴の一つである。

一方、日本は冷戦と昭和の終焉が同じ時期に訪れ、その直後に「バブル」が崩壊し、「失われた一〇年（あるいは二〇年）」と称される（以前に比べれば）低迷の時代にさしかかっている。いわば、「戦後日本」の豊かさや繁栄を支えていた基盤・構造が揺らぎ、自らが依拠したものに對する信頼も失われ漠然とした社会不安も広がっている。新たな枠組みの創出、変革と転身の必要性が認識さ

れてはいるが、リーダーシップの欠如もありいまだに答えを見出せずにいる。また、東アジアは中国の台頭とアジア諸国の躍進など構造的変動を見せている。これは既存の秩序において上位に位置していた日本からすれば、「脅威」であり「不安」の要素といえるが、歴史的かつ大局的な観点に立てば、東アジア国際秩序が「水平化」と「正常化」⁽²⁷⁾へと向かっている潮流であり、韓流もそれを象徴する現象として捉えることが可能である。

いわば、このような混乱と新たな機会の時代に、日本の目の前に「新韓国」が元氣なポップカルチャーを引っ提げて立ち現われてきたのである。日本では、小倉紀蔵の指摘するように「LOOK KOREA」言説の下、日本の「主体化」のための「オルタナティブとしての韓国」という観点が生まれ、それが韓流を支える基底のセンチメントになっている⁽²⁸⁾。韓流ドラマへのあの熱狂は、純愛、家族や人間の絆を通じた濃い人間関係、失われつつある共同体の再生への希求と無縁とは思えない。このように韓流は、「ポスト冷戦」の韓国と「ポスト戦後」の日本の交錯・遭遇の中で生まれた社会現象であるといえよう。

歌手の美輪明宏も、「韓流は日本がマトモになってきた証拠」であると述べている⁽²⁹⁾。「ハンカチ王子」や石川遼に対する関心と同じ文脈で、「まともな」人間や文化に対する再評価が試みられている現象として韓流を位置づけている。美輪は韓国のテレビ番組についても称賛しているが、長年、「芸人とバラドルの宴」と化してしまつた日本の（民放の）テレビ文化に対する批判であるともいえよう。実力派で本格派といえる「POP」に対する熱い反応も、長年、特定の会社やプロデューサーによって似たようなアイドルが再生産されてきた「POP界の保守性や、「じゃんけん大会」がエンターテインメントとして成立する「ゆるさ」に対するアンチテーゼといえるかもしれない。

韓流に対して、主に女性が反応していることは注目に値する。それは単に、「草食男子」が流行語になる世相の中で、イケメンで男らしくて優しく有能なドラマの中の韓国男性に関心が向かうことを意味するだけではない。他方で日本の女性アイドル市場は長年、男性ファンをターゲットにしてきた。女性アイドルは小柄でかわいくて純真でひたむきで愛嬌をふりまき、時には男に媚び

することも厭わない、いわば、男性の支配欲を刺激する対象であったといえる。女性アイドルの主体性や個性よりも、いかに男性にかわいがられるかに焦点が当てられた。ジェンダー間の従属関係が根底にあると指摘されても仕方ない様相であった。だが、今の若い女性たちの中にはそのような関係性を拒否する場合が増えた。男たちに好かれることよりも、自分たちが好きなスタイルを身につけ、かわいさの中にも強さと美しさとかっこよさを備えたいと願う女性が増えてきたのではないだろうか。そのような若い女性の「モデル」として、K-POP女性アーティストが注目されているといえよう。一方、男目線のアイドルに慣れ親しんだ男性たちの中には、スタイル「抜群」で実力も備え、気も強そうな韓国女性アイドル（スター）に違和感を覚え、萎縮してしまう人もいるだろう。少々拡大解釈をすれば、韓流が女性の間で一定の人気を博しているのは、根源的には政治的リーダーシップの欠如など混乱する日本の男性中心の政治・社会・文化に対して、「新しい日本」を求める志向と読むことができる。それを直感的に感じている男性陣からの反発が寄せられるのも当然といえよう。それが韓流に対する複雑な感情、あ

るいは反発が生まれる要因の一つにもなる。結局は、国内問題、「お家事情」の側面が本質にはあるのに、国際問題、外交問題にすり替えられることは往々にしてあることだが、日韓関係においてはお互いがその格好の他者になってしまいうパラダイムがある。

次に、これも関連して、日本社会における韓流に対する別の角度からのまなざしについてみてみよう。一つには、いまだ日本社会には韓国・韓流に対する払拭されない「上から目線」、「優越意識」が存在していることを容易に確認することができる。「冬ソナなんてみない」、「韓流はみない」など「食わず嫌い」の意見から、「ブランドモノ以外に韓国に行く理由なんてないでしょう」、「こいつらバンドなの？ギター弾けんのか？」、「どうせバクリ」、「出稼ぎ」といった偏見に満ちた発言を筆者はいままたに耳にしている。

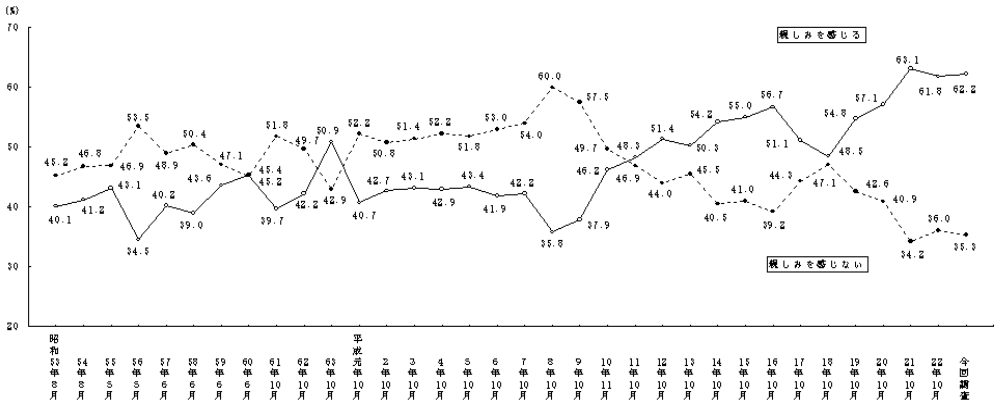
韓流に対するまなざしの中で近年顕著になっているのが、韓流の成功要因を探る上で、韓国の「国策」、「国家戦略」、「世界戦略」という観点である。韓国の成功を語る際の常套句ともなった、「国を挙げて」という観点である。スポーツ分野においては、確かに「国を挙げて」と

いう側面はある。周知のとおり、人気種目およびメダル有望種目の「国家代表」に対しては国の手厚い支援がある。オリンピックなどでメダルを獲った選手には「年金」が付与され、特定の種目においては兵役が免除されることもある。しかし、ポップカルチャーの分野ではどうか？確かに、初期においては、映画アカデミーの設立など文化産業振興のためのレールを敷き、スクリーン・クォーター制度などを通じて文化産業を保護するという側面があった。また、二〇一一年にもハングルを創製した世宗大王の時代をテーマにしたSBSドラマ「뿌리 깊은 나무(根の深い木)」に、韓国コンテンツ振興院が制作支援をするケースはある。しかし、金溶徳(キム・ヨンドク)韓国コンテンツ振興院日本事務所所長は、あくまで(国は)「後方支援」に徹しているという³⁰⁾。しかも、コンテンツ産業の収益は他の産業分野に比べればまだまだ微々たるものである³¹⁾。よく指摘されるように、K-POPの躍進には、脆弱な国内の音楽産業基盤という不遇の環境下において、まず実力を身につけてからアジアや日本に目を向けたグローバルな戦略へと舵を取った結果という側面が強い。国家戦略で「少女時代」が誕生できるのならば、中国、北朝鮮でも誕生す

べきであつたらう。文化は自由で開放的で創意溢れるフュージョンを重んじる社会でこそ開花するものである。現在の韓流、とりわけK-POPブームと国家戦略の関連性については、より慎重な議論が必要である。

また、「練習生」と呼ばれるスター養成システムと過酷な競争システムや、著作権を度外視したYou Tubeなどネット配信戦略が成功の要因であるという分析が続く。これらの指摘はもちろん妥当な面も多いが、韓流(K-POP)それ自体の魅力や実力を素直に認めるよりも、外部要因に求めようとするまなざしが介在していることを物語っている。そこには、韓国企業の躍進が「ウオン安」が根底にあるとの認識同様、K-POPの成功も「アンフェア」な構造の中で生み出されているという意識の表れであるともいえよう。もちろんこのような視線は日本に限らない。欧米の「先進国」のメディアも韓流の流入に対して、文化交流の側面よりも“Attack”、“Invasion”という表現が使われている。既存の文化秩序における既得権益層の新規参入者に対する厳しくも冷笑的なまなざしといえよう。だが、そのようなまなざしが韓流のモチベーションになっ

図1 「韓国に対する親近感」(平成23年「外交に関する世論調査」／内閣府)



文化における権力の側面も看過できない。そもそも日本で「K-POPが「現地化」されていることは、アジアにおける韓流とは顕著に異なる点である。日本のテレビで歌い大衆的な人気を博するには、日本語の歌詞で歌い日本語で受け答えすることが求められる。韓国のアーティストが原曲ではなく、日本語で歌うことは、いわば、本当の意味での「K-POP人気」ではなく、「K-POPアーティストが歌う」K-POPが人気を博しているだけにすぎないのかもしれない。ゆえに、ダンス・パフォーマンスを含めてヴィジュアルが重視されるなど、K-POPそれ自体が日本社会で受け入れられているとは言い難い。K-POPは原曲の韓国語で歌う方がより迫力があり魅力的であることはいままでもない。K-POPがそれ自体として、海外アーティストとして遇される時に、K-POPはブームという騒がしい熱狂ではなく、静かな文化として定着していくであろう。

とはいえ、日本人の韓国に対するイメージは大きく改善された。内閣府の外交に関する世論調査の中の「韓国に対する親近感」(図1)にその進展の度合いが一目瞭然に示されている。韓国に対する親近感は、調査が開始された一九七八年以降はソウルオリンピックが開催された

一九八八年を例外として、ずっと「親しみを感じない」が「親しみを感じる」を上回っていた。「戦後五〇年」をめぐる「歴史認識の季節」の直後である一九九六年の調査では、「親しみを感じない」が六〇%、「親しみを感じる」が三五%とその差が最も開いたが、九八年の金大中大統領の訪日後の九九年には、「親しみを感じる」の方が「感じない」を逆転し、その後もこの構図は変わっていない。日本文化の開放といった政治的リーダーシップの重要性を改めて再確認することができる。また加えて、九七年のサッカー・W杯（フランス大会）のアジア最終予選の際、ソウルでの韓日戦において、韓国代表のサポート席に「Let's go to France together」という横断幕が掲げられるなど、二〇〇二年日韓W杯共催に向けてのダイナミズムもまた、無視できない要因といえるだろう。実際、二〇〇二年の調査では、親しみを感じるが五四・二%、感じないが四〇・五%とその差が大きく開いた。日本社会において韓流が着実に定着した二〇〇〇年代は、靖国問題・教科書問題・北朝鮮の核問題などで冷え込んだ二〇〇六年を除いては、「親しみを感じる」が「感じない」を大きく上回っている。文化の果たした役割を

今一度確認することができよう。とはいえ、植民地支配の歴史を知らない日本人が依然として四〜五人に一人はいるという事実は⁽³²⁾、将来の日韓関係を考える上では、看過できない問題であるといえよう。

いずれにせよ、一般の日本人や有名人が、韓国および韓国の文化やスターを好きと公言できる時代になったことは、日本における韓国認識の「普通化」を意味し、その意義は小さくない。また、日本社会の情報アクセスにおける平等性を含めた「民主化」、「開放化」、「トランスナショナル化」、「多様化」、「トレランス」、「ネットワーク化」、「実力主義」の兆候として捉えることができる。文化（消費）主体としての女性の存在感が、今後の東アジアの文化地形や国際関係までも変えていく可能性を簡単に排除することはできない。

四. 韓流後の日韓関係の諸相——實的变化と多元化

九〇年代以降現在に至るまで、日韓関係は多元化／多層化し、構造的変容を遂げてきた⁽³³⁾。従来の日韓関係は、政府・政治主導で経済に圧倒的比重が置かれ、国民不在、

文化不在の関係であった。だが、その後様々な非国家アクターや個人の存在感も増し、主体の多様化現象がみられた。「ヨン」様や村上春樹といった個人の果たした役割は強調し過ぎることはない。これは政治、安全保障、経済など、従来の「ハイポリティクス」の領域だけでなく国民感情、歴史認識問題が浮上し、社会、文化の領域やインターネット空間も生まれるなど、イシューも多様化していることを意味する。また、「日」／「韓」のそれぞれこの社会が多様化し、日韓関係認識の多様化をもたらしている。このような日韓関係の多元化／多層性は、日韓の「関係正常化」／「関係進化」／「関係変化」の過程と捉えることができる。

ところで、文化の交流が日韓関係に与えた影響を直接的かつ実証的に明らかにすることは不可能に近い。「日韓関係」は多岐にわたって包括的である上に、仮に日韓関係、あるいは相互認識に変化がみられたとしても、それが文化要因によってのみ規定されるとは限らないからである。そこでまず、日韓関係の現在、すなわち「韓流後」の変化の側面をみることで、逆に「文化」の存在の大きさを確認してみよう。

まず、人の移動の飛躍的な増加がみられている。六五年当時年間で一人だった往來の数が、いまや一日の往來数になっている。そして、韓国併合から一〇〇年の節目の年であった二〇一〇年には、日韓間の相互往來は約五六六万人に達し、初めて五〇〇万人を突破した。その内訳をみると、日本から韓国への渡航者数は三〇二万人で、訪韓外国人の中で三四・八%を占め、一位になっている。一方、韓国から日本への渡航者数は二四四万人を数え、訪日外国人中の割合は二八・五%を占め、こちらも一位になっている。その数をみればわかるように、日韓関係の不均衡性が少なくとも人の移動という側面においては是正されているといえる。正確には、人口、為替レート、経済状況を考えたならば、韓国人の日本渡航者の多さは目を見張るものがあるといえる。その背景には、日本の二六の空港から直行定期便が週に六一八便飛んでいることや、韓国人の短期滞在VISAが免除になったこと、ワーキング・ホリデーの参加者枠も二〇〇九年から七二〇〇人に倍増し、二〇一二年までに一万人に拡大することなどで合意がなされたことなどが挙げられる。また、「日韓交流おまつり」が二〇〇五年より毎年開催されている。

次に、政治・経済面での相互依存も深化しているといえる。日本外務省の北東アジア課が作成した「最近の日韓関係」には、「韓国は民主主義、市場経済、基本的人権等の価値観を共有していると同時に、共に米国の同盟国である最も大切な隣国」であるとし、「日韓関係は我が国の対アジア外交の中核」であるとされている。⁽³⁴⁾ 韓国併合から一〇〇年の節目の年である二〇一〇年には、菅直人総理（当時）による「首相談話」が発表され韓国でも一定の評価を得た。また、「日韓同盟」論まで浮上するなか、ハイチPLOにおいては日韓連携の実績も積み重ねられている⁽³⁵⁾。さらに玄葉光一郎外相は、二〇一一年一〇月六日、「日韓は死活的利益を共有している」⁽³⁶⁾と、従来よりも踏み込んだ表現を使っている。『朝鮮王朝儀軌』や正祖の文集『弘齊全書』など、文化財の返還なども実現した。経済面でも日韓は双方に中国、米国に次ぐ第三位の貿易相手国であり、日本からの対韓投資も、二〇〇三年日韓投資協定の発効以降に大幅に増加し、年間一〇億から二〇億ドル規模で推移している。

社会・文化的側面における関係も、「韓流後」は以前との比較でいえば飛躍的に進展した。まず、教育・研究面

において、韓国からの留学生が飛躍的に増え、韓国への留学生も増えている。日本では韓国語（朝鮮語）を第二外国語に採択する大学が増え、児童書においても韓国が紹介される場合も出てきた。より重要なことは韓国研究機関が誕生したことである。二〇〇五年に立命館大学コリア研究センターが設立され、二〇〇九年には慶応大学に現代韓国研究センターが誕生した。そして、二〇一〇年には東京大学に現代韓国研究センターが設立された。韓国人研究者が日本の大学で教育・研究の機会を得るケースも、この一〇年で飛躍的に増大した。このような日本での流れが韓国の対日認識に与える影響は、長期的にみてけつして少なくないといえる。実際、二〇一一年一〇月に、ソウル大学に初めて日本学専攻コースが設置されると報じられるなど、具体的に相互作用を引き起こしている。ソウル大学が日本学専攻コースを設置することになれば、他の主要大学である延世大学や梨花女子大学などへの波及効果も考えられる。これらが、日本における韓流と無縁といえるだろうか。韓流の日韓関係における外交的含意はすでに、このように表れている。文化における相互作用の側面を改めて確認することができる。

次に、日本のメディアではあまり報じられていないが、日韓の間では未来の日韓関係の一つの方向性を指し示す、文化面での数々のコラボレーションが地道に試みられてきた。二〇〇四年、坂本龍一と韓国の吟遊詩人と呼ばれるラッパーであるMc Sniperが、イラク戦争への反対のメッセージを込めた「Undercooled」という楽曲を発表した⁽³⁸⁾。歌詞はMc Sniperによって書かれ、日本の通常の歌番組で、韓国語でそのまま歌われた。Mc Sniperはその後、松任谷由美ともコラボレーションを行い、コンサート・ツアーに参加するとともに、松任谷由美の「春よ、来い」を独特の世界観でリメイクして、日韓の文化フュージョンのよきモデルを提供した。

また、小説『冷静と情熱のあいだ』の日韓双方での大ヒットを受けて、その日韓バージョンが試みられた。戦後六〇年、(植民地)解放六〇周年、日韓国交正常化四〇周年を迎えた二〇〇五年、作家の辻仁成とコン・ジヨンが取り組んだ「遠い空近い海」という共同小説のコラボレーションも歴史に残るものであった。その後辻仁成は、「序詩」などで有名な韓国の詩人・尹東柱^{ユン・ドンジュ}について、韓国⁽³⁹⁾の延世大学で講演した。日本の現代作家が韓国の詩

人について、韓国の大学で語るというトランスナショナルな試みは、日韓の知的交流の成熟さを示す一例である。韓国における日本小説の人気の裏には、辻のような地道な活動があることも忘れてはならない。もちろん、このような「市民社会」を志向するコラボレーションだけでなく、日韓相互にカバー・ソングを発表したり、映画やドラマにおける合作、バラエティ部門での交流なども意欲的に試みられたりしたことは、周知のとおりである。これらの文化のフュージョンやコラボレーションは互いに対する親近感の高まりの表れであり、互いの文化地帯を豊かにしたことはない。

さらに、東日本大震災における韓国の寄付・支援活動は、日本ではあまりその詳細は報じられてこなかったが、特筆すべき出来事であった。日韓関係を考える上で極めて重要だと思えるので、少し詳しく触れたい。

東日本大震災の前にも、ペ・ヨンジュンは日本のファン(市民)との「文化的な関係」の構築に大きく貢献した。彼は韓国人として、日本人を初めて「家族」と呼んだ歴史的人物でもある。その彼は新潟県中越地震の際にも、義援に積極的であり、日本テレビの「二四時間テレ

ビ」にも参加した。東日本大震災においても、日本の主な芸能人よりさきがけて、五億円を義援金として差し出した。その後、多くの韓流スターも義援の列に並び、日本でもその直後にAKB48がベ・ヨンジュンと同じ五億円を寄付した。海外のタレントがこれほどの義援金を出したことは特筆に値するといえる。新韓流の主役の一人であるチャン・グンソクも、「Don't give up Japan」、「がんばれ日本」と書かれたメッセージを掲げ、直接被災者と交流する独特の支援活動を展開した。

韓国のテレビ局も一斉に国民的に義援金を募る特別番組を編成した。ソウル放送(SBS)は「日本地震被害救済特別生放送」と題する番組を編成し、韓流スターのリュ・シウォンが進行を担当した。文化放送(MBC)は「特別生放送 共に分かち合う世界」と題する番組を通じて、政治家やソウル市長など政治家や各界を代表する人々の義援の模様を伝えた。進行はユン・ソナが担当した。

国営の韓国放送(KBS)は「特別生放送 日本大地震被害支援 希望音楽会」を開催した。ここでは、韓国歌謡界を代表する大物歌手であるペティ・キム、李美子、^{イミョンジャ}趙英男の三人が一度に会し、国民的名曲「그대 그리고

너(君、そして僕(私))」などを披露した。李美子は自分の曲を歌う前に、「近い隣人の痛みとつらさを前に、私たちは温かい心、愛する心、慰める心をもってこのように集まり、この場に参加することができてとても嬉しく、感謝いたします」、「韓国の国民のみなさん、みんなどうか愛(サラン)の心で、温かい心を胸の奥底まで伝えることができるのならば、という願いです。」というメッセージを残した。

この番組では音楽会の最中に、視聴者から電話を通じて義援金を募るという方式を採用した。電話受付には、B EAST、FT ISLAND、4Minuteなど、総勢二〇人以上のK-POPアイドルたちが参加した。また、(国内向けの)KBS (http://twitter.com/KBSMusicBank)と(海外向けの)KBSワールド (http://twitter.com/kbsworldtv)の両方のツイッターに、希望と応援のメッセージを残してくださいと呼びかけ、番組の途中でそれらをリアルタイムで紹介した。例えば、以下のようなメッセージが届けられた。「私たちが苦しんでいた時に日本が助けてくれたように、今度は私たちが助けます。恐怖感でとてもつらいと思いますが、少しでも力になればと思います！フアイト！」(@lovey

고맙습니다。」「近くにいなながら何もできなくて胸が痛い
です。傷ついた痛みがすべて消え去ることはないと思うけ
ど、それでも元氣出してください」(011:1×××)、「プヒ
ョン女子高校の一年生です。学校にいなながらもクラスの
友達はみんな日本のニュースをみながらとても心配して
います。どうかこれ以上の犠牲者が出ないことだけを祈
ります。頑張つて！」(015:1×××)。これらに対して日
本の被災者からも「ありがとうございます。一人の日本
人として頑張ります！」という返答が寄せられた。

これらの番組において共通して掲げられたスローガン
は、「힘내요! 일본(頑張れ!日本)」、「이젠 울지마요,
일본(もう泣かないで、日本)」というものだった。テ
レビ番組だけでなく、一般の国民も義援活動に積極的だ
った。学校では子どもたちが寄付金を募る活動を積極的
に行い、日本の学校と姉妹協定を結んでいる学校の学生
は、日本語で日本の友人に手紙を書いた。韓流スターだ
けでなく、全国的レベルで支援の手が差し伸べられた
のである。元従軍慰安婦の女性を中心とするいわゆる「水
曜集会」においても、日本への同情と支援の意が示され
た。また、韓国のサッカー選手・朴智星(パク・チソン)の朴智星財団(

財団)は、日中韓ユースサッカー大会を主催し、被災地
の仙台のチームを招待した。

韓国において、日本に対して金銭を伴う義援を公に行
うことの意味はそう簡単な問題ではない。歴史に根差す
国民感情の上に、「日本にお金持ち」というイメージがあ
るなか、韓国が日本に資金的な援助をすることはある種
の覚悟のいることであるし、日韓の非対称性の克服、対
等な関係に向けての重要な事例となったといえよう。上
記の番組でMB(アナウンサーは、日本に対して「이웃사촌
(イウツサチオン)」という表現を使った。この言葉は、
隣人(이웃)は(たとえ他人でも)いとこぐらい近い親
戚であるという、隣人との親しい関係を意味する韓国独
特の言い回しである。この言葉が公式に日本に対して使
われたのである。これまで日韓関係を規定する枕詞が「近
くて遠い国」であったのを思えば、これは特筆に値する。
震災はもちろん悲劇的なことだが、日韓関係の文脈に限
定すれば、韓国人が初めて日本人を素直に「隣人」と呼
び、心から同情を示す契機になったともいえる。韓国の
支援の模様については、もう少し日本でも報じられても
よかったが、実際には、アメリカの「トモダチ作戦」の

ような肯定的なイメージを残すことはできなかった。日韓関係の改善のためには、両国のメディアの報道姿勢が問われるとともに、主要メディアに頼らずソーシャル・ネットワークなど様々な信頼できるソースを通じて、独自に情報を主体的に取捨選択する必要もあるといえよう。

以上のような出来事は日韓関係が、従来の政治・歴史問題・経済重視の関係という枠組みだけでなく、お互いの顔が見える関係、人々の心と心が通い合う「文化的」な関係の側面も育まれる、多元的な関係へと移行しつつある諸相であるといえよう。

五. 文化交流と日韓関係への含意

——文化交流の可能性と限界

では、文化が日韓関係に及ぼす影響、文化交流の可能性と限界について考えてみたい。文化と日韓関係を語る際によく指摘されることは、韓流／日流など文化交流があつても、ポップカルチャーはポップカルチャーにすぎず、日韓の間に横たわる問題群（歴史認識問題、独島（竹島）問題、国民感情・相互認識など）の解決にはならず、

日韓関係は基本的に何も変わらないという議論である。

これは、「文化」に過剰な期待を込めて、「未来志向」を掛け声にし、安易な「日韓友好論」、「日韓提携論」を唱えることに對して警鐘を鳴らすリベラル派、国際関係を基本的に国家とパワーの観点から捉えようとするリアリスト、そもそも日韓関係の進展自体をそれほど歓迎しない右派ナシオナリストなど、各方面から一様に提起される議論でもある。しかし、これは少し奇妙といえる。なぜなら、文化交流が活性化する以前も、上記の懸案は本質的には何も解決されておらず、日韓は反目と葛藤のなか「非対称」で「非正常」な関係が続いた。「文化」に頼らざるをえないほど、日韓の間には「国家主義」や「民族主義」の高い壁が横たわっており、人々は相手の言語や文化も知らず、とりわけ日本では無関心・避関心が続き、精神的に「断絶」していたのである。そのような関係により、両国の心理的距離は以前よりは縮まったといえる。「文化」に日韓の懸案を解決する力がないことを指摘し、文化を論じることを「冷笑」する立場からは、「警鐘」以上の生産的な何かが生まれるとは思えない。

もちろん、文化は「特効薬」ではない。文化を過大評価して懸案に取り組む努力を放棄し、その隠れ蓑として「文化」を利用してはならない。それでは、基本的にコンテンツ産業とビジネスの論理に文化が支配されてしまっただろう。とはいえ、文化には目に見えないサブリミナル効果があり、その効果は実は長期的な観点において表れるものである。文化の接触が他者に対する「認知」から始まり、同質感と異質感の狭間のなかで認識に徐々に影響を与え、ひいては、自省と自己変革への契機になる可能性は往々にしてある。国際関係は結局のところ、構成員一人一人の認識の集積による「国際認識」、「自己認識」、「歴史認識」、「時代認識」によって規定されてきたといえる。実際、日本が朝鮮半島を植民地支配したのも、「近代」という時代認識、朝鮮半島に対する植民地主義的認識やまなざしに支えられていた。そして、それらを相対化しうる「文化」の不在が日韓関係を不幸なものにした。そのような認識形成に影響を及ぼし得る要因として、文化の力は計り知れない。重要なことは文化それ自体よりも、どのような文化であり、文化をどう活用するかという問題であろう。

文化の力についていえば、日本における韓流が韓国における日流を引き起こしたという、「文化の相互作用」の側面は注目し得る。日本における韓流のみが注目されがちであるが、実は韓国においても、「日流」とも呼ばれる日本文化に対する関心の高さと浸透状況がみられる。⁴⁰⁾ここでは深く立ち入らないが、ちょうど日本の韓流ブームと呼応するように、韓国では空前の日本文学ブームが巻き起こった。村上春樹、江國香織、奥田英郎、東野圭吾、宮部みゆき、吉本ばなな、吉田修一などが高い人気を博している。韓国文学よりも日本文学の方がベストセラーになった数が多い年もあり、村上春樹の『1Q84』は二〇〇九年の年間総合ベストセラーに輝いた。小説だけでなくエッセーや実用書の翻訳、あるいは雑誌や文庫本などが原書のまま普通に売られている。出版だけでなく、グルメ、ファッション、車など商品分野において日本文化は急速に浸透しているし、⁴¹⁾ドラマ・映画・J-POP・バラエティなどエンターテインメントについてもケーブル・テレビやネットなどを通じて一定程度は普及している。世界で日本語学習者が最も多く、大学でも日本関連学科が普及している韓国では、「開放」前から日本大衆文化は

日本語学習、日本語のツールとしても浸透していた。韓国で日本文化を享受することは、日本で韓国文化を好きになることよりも一段階高いナショナルイデオロギの壁を乗り越える必要がある。日本で「韓流ファン」になることは、韓国人によって歓迎されたり、「日韓友好」に寄与すると評価されたりする機会が多いが、韓国で日本文化を享受することは「親日派」というレッテルと戦わなければならなかった。その意味で、韓国で日流現象が起きたことはさらに注目に値する。

韓国では人の名前を呼ぶ際に親しみを込めて、苗字ではなく下の名前で呼び合うことが一般的だが、今は日本人である浅田真央や村上春樹を「マオ」、「ハルキ」と呼べることから、対日認識の変化を読み取ることができている。また、かつては植民地時代の残滓として、徹底的に排斥されていた日本語の名残や表現についても寛容になる傾向がある。例えば、「ヒヤシ（冷し）」「ヤメ（闇）」、「ナンニング（ランニング・シャツ）」、「十八番」、「必殺技」などは面白い表現として日常化しており、また、「かんじ」⁽⁴⁾、「ちゃん」、「カワイイ」、「スゴイ」など、新たに「外来語」として定着している言葉も増えてきている。

日本において韓流が起きたからこそ、韓国人は長年の日本に対する不信感、偏見、被害意識を緩和させることができ、日本文化に対する拒否感を払拭することが可能になった。もちろん、文化の消費によって歴史認識にも変化が生じるとは言えず、文化が歴史認識問題を解決に導くとも思えないが、日韓関係に影響を及ぼしたといえる事例もある。二〇一〇年八月、韓国併合から百年の節目の年ということで、韓国では関連のドキュメンタリーや行事が目白押しであった。だが、八月二五日に少女時代が日本初のイベントを開催したことで、メディアはこのニュースをより大々的に報じた。韓国人は日本の少女が、まだ日本デビュー前の少女時代のコスプレ姿で、少女時代のライブに熱狂するシーンを目撃した。文化を政治的に利用することは避けるべきであるが、結果的には、「反日感情」が盛り上がることはなく、「歴史」によって繰り返される関係冷却化のサイクルを辿ることはなかった。また、韓国のメディアやブロガーたちは、日本における韓流現象を逐一伝えている。二〇一一年夏にも「新韓流」に関するドキュメンタリー・報道番組が目白押しだった。BBSのドキュメンタリー番組『三日間』は、大久保コリア

ンタウンの人間模様を取り上げた。自己満足とナショナルリズムに満ちた報じ方ではなく、見る者が自然と日韓の距離の近さを感じられる構成になっていた。フジテレビ前での「反韓流デモ」が起きた時期に、このような番組を見れば、日本は「嫌韓」の国で、韓国を蔑視しているという単純化されたイメージの払拭に役立つであろう。

また、韓国における日本文化に対する抵抗感も幾分緩和するだろう。このような文化の「双方向性」と「相互作用」こそ、日韓関係の変容を物語る象徴的事象といえる。

韓流／日流現象は、日韓双方が互いに対する「コンプレックス」の克服と「タブー」からの脱却を示し、堅固なナショナルな認識体系に亀裂を生じさせている証でもあるといえる。韓国人は世界のどの国よりも日本を意識してきた（あるいはせざるをえなかった）。スポーツなどでも、他の国に負けても日本にさえ勝てばいいという屈折した意識に長年支配されてきた。だが、日本が韓国の文化を受け入れ好きになり、韓国もあらゆる分野で自信をつけたことにより、ようやくそのような「ジャパン・コンプレックス」という呪縛から解放されるようになった。⁽⁴³⁾ 日本スタイルだから韓国人はしない、という「ネ

ガティブ・アイデンティフィケーション」の必要性もなくなった。例えば、歌謡曲で英語の歌詞を入れたり、「軽薄」で「意味不明」でカワイイ言葉を用いることは「日本」のすることだから、韓国人はしないと意地を張ってきた。女性アイドルが肌を露出したり、セクシーなダンスをしたり、愛嬌をふりまくことも日本の「低俗な」文化の象徴とされた。でも、韓国にもニーズは存在した。

だから、アンダーグラウンドで日本のアイドルやJ-popが消費されていたのである。「日本の軽さ」の象徴であった、「女性アイドル文化」を受け入れることができたことは、一面では「対日コンプレックス」の克服を意味し、自分に素直になることを恐れなくなった韓国社会の自由化・開放化をも意味している。⁽⁴⁴⁾ 日本においても、「カンコク」という言葉の響きが、これほどまでに日本社会にこだまするようになったことは、少なくとも「韓国」についてのタブーは大きく緩和されたことを物語っている。

文化交通を通じて、文化的国際関係が構築されることは、「国家イメージ」や「国家ブランディング」に対する関心が高まることにつながる。実際、韓流ブームの基底には、韓国のコンテンツおよびスターに表象される「誠

実さ」、「優しさ」、「ひたむきさ」、「真摯さ」、「純粹さ」、「情の深さ」という側面に対して共鳴するセンチメントがある。日本や欧米のスターとは一味違うという印象が初期の韓流の魅力を拡散させた側面もある。韓流はある意味、社会や個人、それらの関係性における「モデル」、「あるべき理想」の輸出でもある。ドラマで描かれる韓国社会のある一面、K-POPスターのパフォーマンスから、それらを生み出す今の韓国についての関心が高まるのである。今後はこのような「韓流ブランド」に対する韓国人の責任意識が求められる。つまり、国、政治、社会、文化の品格を高めることが求められ、それだけ国格や人格が高められる可能性が生まれる。国際関係において「文化」の側面が重視されることは、軍事力や経済力といったハード・パワーだけではなく多元的なリソースに対する認識を高めるとともに、イメージやブランド力に対する関心を高める効果がある。それはひいては「モラル・プレステイジ (moral prestige)」を高めることにもつながり、相互性とマナーとソフトパワーを重視する「文化的国際関係」へと導く可能性があるといえよう。

とはいえ、「新韓流」は次のような問題点も孕んでお

り、一歩間違えば「韓流摩擦」を引き起こし、日韓の新たな葛藤の火種になるかもしれない。「ワナ」でもあることに留意する必要がある。

第一は、先にも指摘したまだ払拭されぬ日本側の「上から目線」である。K-POPが日本で受け入れられるために、「美脚」、「腹筋」といった肉体美や、「ヒップダンス」といったセックス・アピールが過剰に強調される傾向にある。番組の中でK-POP女性アイドルに対する扱われ方において、韓国人の情緒からすれば違和感を覚えるようことも起きる。いわば、欧米の海外アーティストとは違って、リスベクトよりも出演させてあげているという意識が垣間見られる。それらを通じて、円高目当ての「出稼ぎアイドル」というイメージが増幅される。これらは逐一、韓国のネットで紹介されるので、過激な報道の中には、韓国のアイドルが侮辱されたという「国民の物語」として語られてしまう。

第二に、新韓流はその拡張性と勢いのために反動を生みやすい。二〇一一年に入ってK-POPブームを背景に「地上波」への進出が顕著になったことで、一部の反発を生んだ。二〇一一年八月のフジテレビ前での「反韓流デモ」

などはその一例だ。韓国の保守系メディアは、このデモを韓流スターの入国拒否問題と絡めて、韓流が意図的に抑圧されているのではと疑問を呈した。だが実際には、「J-POP」や「AKB48」なども「デビュー」し、当のフジテレビも昼に三つの韓流ドラマを立て続けに放送するなど、圧力に屈しない「主体性」を誇示した。その現状を韓国のメディアもきちんとフォローすべきだろう。先述のようにグローバル化する韓流に鑑み、日本で「反韓流」のムーブメントが起きても、世界の人々の理解を得ることは難しく、かえって「クール・ジャパン」を押し進める日本のイメージダウンになるのではと懸念される。今の日本であつての韓国のように、隣国の文化に対してナショナルな反感・規制の論理が台頭していることは、文化の越境と東アジアの国際関係を考える上で、興味深い事象といえよう。

第三に、文化の「軽薄さ」と「無国籍性(脱韓国性)」についてである。「冬ソナ」、ヨン様に象徴されるかつての韓流は、「韓国らしさ」アジアらしさをベースに、「純粋」で敬愛に依拠した市民の文化交流という観があつた。先述のようにヨン様は日本のファンを「家族」と呼び、

中高年女性は韓国語や韓国の歴史を学んだりした。だが、今のアイドル・グループ中心の「K-POP」ブームでは、「同質感」をベースに未梢的な感覚に訴えている傾向にある。

縦ノリのビートと華麗なダンスは「言葉の壁」を乗り越えたが、その半面、「韓国」であることの意味は希釈され、他者との異文化体験を通じたフュージョンと自らの「主体化」にはつながりにくい。J-POPの場合でも、AKB48を聞くのと、中島みゆき、井上陽水、ミスター・チルドレンを聴くのとでは雲泥の差といえる。また、K-POPアイドルばかり注目されると、文化的マイノリティだった中高年女性が再び隅に追いやられるかもしれない。

第四に、主に韓国のビジネス側の問題点である。ブームによつて、韓流コンテンツの価格が上がりあがつており、現場やファンの間では不満の声も高く、「韓流バブル」がはじけるとの見方も示されている。⁽⁴⁵⁾ 韓国ではテレビ局主催の一般に開かれた音楽イベントが多いが、同様の場合でも、日本では高額の入場料が必要とされる。K-POPに詳しい古家正亨氏によれば、チャリティ・イベントにおいても入場料を全額寄付するのではなく、グッズの上売り上げの一部をチャリティに回す形になっており、具体的

にどれほどのチャリテイが行われているか不透明であるという。⁽⁴⁶⁾一部ではあるだろうが、震災に便乗した商魂があるとしたら、由々しき問題である。また古家氏によれば、ライブなどチケット代金が高いために、観客はほとんど中高年であり、若い人がライブに行けない状況になっているという。これでは、K-POPがせっかく若い世代に波及しているのに、人氣が持続せず終息してしまう可能性がある。日本ではまだ新人のK-POPアーティストがすぐに大きな会場でライブを開催するのではなく、FT ISLANDのように地道な活動を通じてファンとともに成長していくモデルをもっと参考にすべきではないだろうか。キネマ旬報社の韓流関連担当者も、初期の低姿勢と違って、とりわけ取材においても高いバリアが設けられつつあるという。⁽⁴⁷⁾韓国でよくみられる、売れるアイテムにみなが一歩集中し、一攫千金を狙うビジネス慣行は、自ら「墓穴」を掘ることになるとともに、せっかくな新たな潮流を生み出している日韓の文化交流の側面すら阻害してしまう危険性があるといえよう。もはや国際関係の文脈も持ち合わせている韓流については、韓流のビジネスの論理に回収されない、より慎重で節度ある対応が求められる。韓

流の持続的な進展を望むならば、韓国内でこの点についての注意の喚起が必要であり、日韓双方の現場の人や識者が率直に意見交換するフォーラムの開催が要される。

この第三と第四の側面は、韓国側に先述の「文化主体」としての自覚を促すことになる。韓流を単にビジネス、ナシヨナリズム、グローバル戦略として捉えるのではなく、なぜ韓流に反応があるのかという側面について、より真摯に悩む必要がある。「ブランド・パブル」を引き起こし、韓国への期待や憧れや親近感が失望に転じないよう、常に謙虚さと誠実さを忘れずに、「韓流」の「韓」を磨く努力を怠らず、例えば「Be-Korean Project」などを通じて、自らの文化を再吟味する営みが必要である。なぜ近年、韓国では『ISA』、『ペパーミント・キャンディ』、『殺人の追憶』、『冬のソナタ』のような作品が生まれなくなったのかについて、真摯に悩む必要がある。また、「アジアを超えてグローバル(世界)に」というスローガンの下、アジアや日本のマーケット、ファンをないがしろにする動きがあってはならない。それでは、既存の階層的文化秩序を再生産することにほかならず、階層秩序の底辺から上昇した韓国だからこそ、「文化帝国主義」に対す

る懸念など、文化受容国の国民感情についてのセンシティブイティをもたなければならぬ。

最後に、文化交流の新たな「非対称性」による日韓のずれ違いのパラダイムである。日本側からすれば、韓国の文化や製品が一方的かつ急速に日本に流入することに對して違和感を覚え、それは韓国の国家戦略ではないかという懸念と共に、新たな対韓脅威認識と偏見が形成される可能性がある。また、韓流によって日本側は韓国に大きな「貸し」をつくつたという意識が生まれ、何かあれば「日本はこんなに韓国を好きなのに、韓国はいまだに反日なのか」と韓流に無関心な人ほど思うだろう。これと関連して近年、日本は政府レベルでも韓国に関心を寄せているのに、韓国では中国に對する関心が高く、相對的に日本に對する関心は低くなっているのではという認識とも連動している⁽⁴⁸⁾。だが前者については、先述のように文化のジャンルの違いと日韓の市場規模の相違があるのであって、日韓のトータル文化浸透にはそれほど非対称性があるとはいえない。むしろ、貿易収支に示されるように、長年韓国は日本に對して莫大な貿易赤字を甘受してきた。韓国ドラマやK-POPが日本のお茶の間を

一時期「占拠」したからといって、あからさまな反対デモが起き、その後明らかに韓流の比重が減っていく日本社会の認識・まなざしこそ問われる必要があるといえよう。韓国の「脱日」志向に関しては、近年韓国において、日本の政治的リーダーシップの欠如や震災の影響もあり、以前との比較であるが相對的に「日本軽視」の風潮も見られるのは確かであり、日韓のより戦略的かつ多次元の対話が必要といえよう。また、韓流によって政治・歴史・相互認識の問題などを提起しづらくなる雰囲気醸成されることは、問題であるといえよう。

おわりに——「文化的日韓関係」に向けて

「新韓流」は以上の問題を孕みつつも、新しい歴史的现象として注目に値する。今後は韓国社会と日本社会の多様性に立脚した、交流および関係認識の多元化が求められる。文化交流も特定のジャンルやスターに偏重するのではなく、ジャンルの拡大と質の維持・向上を通じた底辺の拡大を目指すことで、両国の文化はさらに成熟し

ていくだろう。⁽⁴⁾

また、大衆文化だけでなく知的・学術的・ハイカルチャーのレベルにおける交流の深化が要されることは言を俟たない。そのためにもお互いの言語を習得するプログラムの開発と、日本における「韓国学」、「朝鮮半島学」の振興が求められる。韓国の大学における日本語や日本学ほどの充実が期待できなくとも、これまであまりに軽視されてきた韓国・朝鮮半島についての教育環境の整備は喫緊の課題といえる。言語学習の促進と翻訳・出版事業の振興など、知的財産の共有への試みも重要である。

その意味で二〇一一年韓国文化院で、「韓国文学（≒文学）読書感想文コンテスト」⁽⁵⁾が試みられることは、韓流の深化現象として注目すべき潮流といえるだろう。

韓流、日流が単なる消費、商品、マーケティングの論理を超えて、「日韓新時代」を開くために必要なことは何か？ その一つには、日韓の市民社会のトランスナショナルな交錯を通じて、「もう一つの韓流／日流」についても注目する成熟さが挙げられる。例えば、韓流ブームの只中で雑誌『インバクシヨン』（二〇〇五年一〇月号）は「もうひとつの〈韓流〉」という特集を組んだ。単にポップカル

チャーだけでなく、韓国の民主化のダイナミズム、活発な市民運動や市民社会に注目する観点を提示したのである。韓国の「デジタル・デモクラシー」について、日本で初めて本格的に紹介されたのもこの時期であった。⁽⁶⁾

また、日韓の主要メディアではあまり報じられていないが、日韓の市民レベルにおいて国家や暴力の論理を超え「和解」への歩みを見せる、トランスナショナルな連帯の動きもみられる。例えば、二〇〇五年、教科書問題と小泉総理の靖国神社参拝により、日韓関係が冷え切っていた時期に、韓国では日本の「青年劇場」によって、三浦綾子原作の『銃口』が全国で巡回公演された。三浦綾子の夫である三浦光世は、『銃口』のソウル公演の初日に参加した。彼は『ハンギョレ21』とのインタビューにおいて、「生前の綾子は、日本の軍国主義的侵略戦争に同調したことに対する罪悪感のせいで、韓国に行くことがあっても、堂々と胸を張って歩くことができないだろう」と苦悩していた」と打ち明けた。⁽⁷⁾ また三浦氏は、「一・三光州学生運動塔」、「五・一八光州民衆抗争墓地」を訪ね、青年劇場韓国公演団員と一緒に頭花した。彼はそれについて、「尊い命で守った韓国の民主化に対して、韓国の市民

と若者はプライドをもっていい」、「これ以上、人間が人間に銃口を向けることのないよう、国家間の戦争がなくなり、武器を捨て去る日が来ること」を祈ったと語った。三浦綾子のファンという光州の「オモニ」たちのチャンネルによるアリランに返歌として、三浦氏は「赤とんぼ」を歌った⁽⁵³⁾。三浦綾子の平和と愛への念願は、韓国の読者に引き継がれ、日韓市民の共感を生み出しているのである。また、明成皇后殺害事件を反省する日本の教師団体が韓国を訪れ、謝罪の意を伝えるとともに、歴史の真実を伝えていくと語ったとも報じられている⁽⁵⁴⁾。これらの事実と報道を通じて、韓国の市民たちは、日本の「良心的」市民の存在を確認しているが、日韓の草の根の「絆」を強くする方向性であるといえよう。

韓国の市民社会の展開において、日本の文化がシンク口する現象も垣間見られる。例えば、韓国では近年、「青少年人權運動団体」が頭髮規制、強制夜間自習、障害児問題など、学内での人權問題に関心をもち活発な活動を展開しているが、その中の一つ「청소년인권활동아수나로(青少年人權行動 あすなる、cfe.naver.com/asmnar0)」の「あすなる」は、村上龍の小説『エクソダス』に

出てくる青少年団体の名前からつけられたという⁽⁵⁵⁾。また、ノ・ムヒョン元大統領の追悼コンサートタイトルの「천개의 바람이 되어(千の風になつて)」（二〇一〇年二月）であった。また、松任谷由美のワールド・ツアーにも同行した実力派歌手のイム・ヒョンジュも、同じ時期にこの世を去ったノ・ムヒョン前大統領、キム・スファン枢機卿、加藤和彦を自らの恩人であり、「英雄」と称し、『Crystal Tears』という三人の「英雄」を追悼するアルバムを発表した⁽⁵⁶⁾。これらは日韓の文化が融合した、もう一つの日韓の文化／社会交流のあり方であり、「文化共同体」あるいは「KOREAN」に向けての世界であるといえる。また、二〇一〇年には日本で反原発の活動が活性化したが、韓国の市民社会の存在はそれらを後押しする可能性がある。このような日韓市民社会のトランスナショナルな提携を通じて、「三・一」後の「代案秩序」の模索へとつながる可能性を見出すことができる。

文化交流、市民社会の連帯という潮流を日韓関係の進展に活かしていくためには、やはり政治的リーダーシップが必要不可欠である。グローバル化とリージョナル化

に対応するためにも、「²²」時代と呼ばれる時代において、「戦略的パートナー」としての日韓関係を構築するため、日韓の外交構想／政策の再構築が必要といえよう。これについては別稿に譲るとして、ここではその前提となる考え方やいくつかの方向性について指摘するに止めたい。

まず、思想的課題としての「世界」崇拜意識の見直しが求められる。長年、日本では「洋学／邦楽」、「洋画／邦画」という分け方が一般的であったが、韓国も同様に、「외화(外画)／가요(邦画)」、「팝뮤직(ポップミュージック)／가요(歌謡)」という分け方が一般的だった。文学も両国とも海外文学、外国文学といえば欧米文学を意味した。日韓両国とも、いかに隣国や近隣地域を度外視して海の向こうの欧米文化に憧れてきたかがわかる。近年、ライバルとして日韓が強調される傾向にあるが、これは結局のところ、「世界」に対する距離感の競争をしているといえる。アジアで「一位」の座を争ったり、「アジアで唯一の」という称号を求めている。日本の対韓脅威認識もこの「世界」との距離感における「焦り」を背景にしている。「世界基準」を求めて日韓がよきライバル

になることはいい。だが、「世界」への憧れが自己目的化する競争のパラダイムではなく、日韓が協力して東アジアが世界になるような、あるいは世界は多元的であることを示すような動きをみせてほしい。少し大袈裟に言えば、「世界」崇拜、階層的文化秩序意識に対する革命的転換が必要といえよう。日韓は相互の言語、文化、知的財産を尊重し、保存しうる大切なパートナーでもあるという意識を持つ必要がある。

アジア・世界における「日韓提携」の余地はあまりに多い。ヨーロッパでのK-POP人気の背景・過程を見れば、「文化外交」における「日韓提携」の可能性をみてとることができる。彼らからすれば、日本か韓国かという区別はあまり意味がない。「²³」か²⁴ではなく、K-Cultureとして提携して共に市場開拓をする。世界からの観光客を誘致するためにも、日韓両方を回れるツアーやプログラム、共通の交通バス、宿泊サービスなどが考えられる。これらを通じて日韓関係を「ゼロサム」から「プラスサム」へ、「日韓共同文化」の可能性へとパラダイムの転換をしていくことが可能だ。

東アジア地域主義の文脈においても日韓関係は極めて

重要である。ギルバート・ロツズマンは、北東アジアの地域主義の進展にはローカリズムの進展が重要であると指摘した⁽⁵⁷⁾。そこで筆者は、「海の日韓ネットワーク」構想を提唱したい。釜山、麗水、木浦、珍島、済州島、対馬、福岡、佐賀、長崎、山口など玄界灘の海域地域は歴史的にもゆかりが深い。これらの地域はかつて、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際の主たる戦場であり、植民地期には哀しい歴史を有する海峡地域でもある。このようなネガティブな記憶を有する海峡を新たにネットワークで結び成長と融合の拠点にすることで、日韓新時代・東アジア時代の中心の一つになりうるのではないだろうか。日本でも「太平洋」中心の時代から「日本海（韓国では「東海」）、黄海に注目し、「西日本」を中心とする時代へのシフトを主張する論調がある⁽⁵⁸⁾。「東アジアの時代」が話題になるなか、米国との関係を中心にした二〇世紀的枠組みの再検討が求められている。震災以降は、西日本に対する注目も高まった。この際、日本の重心を西に向かわせる、もう一つの「LOOK WEST」政策が必要なのではないだろうか。LOOK WEST政策の要は「西京」としての福岡に注目する視点である⁽⁵⁹⁾。福岡県の麻生渡知事は、二〇一一年三月

二二日に開催されたシンポジウム「アジアと共に発展する福岡」において、「福岡・アジア国際戦略特区」構想の推進を強調した。麻生知事は、アジアのエネルギーを取り入れるべく、インフラ（社会資本）整備や財政、税制、金融上の支援などの政策を総合投入する特区の必要性を説き、東京、大阪、名古屋の大都市圏が中心の発展戦略からの転換が必要であると主張した⁽⁶⁰⁾。このようなアジアに開かれた二一世紀型の新しいタイプの都市圏をつくり、そのネットワークを通じて、ローカリズムからナショナルリズムを乗り越え、リージョナリズムへと波及する可能性について真摯に検討してもいいだろう。

課題としての「北朝鮮」についても置き去りにしてはならない。韓流は日本人の対朝鮮半島認識における、韓国と北朝鮮の分離をさらに促した。北朝鮮との政治的・歴史的アプローチはもちろん重要であり緊要である。しかし、そのためにも北朝鮮に対しても当面は文化面のアプローチが有用といえよう。閉鎖的な北朝鮮だが越境する文化を完全にはコントロールできない。脱北女性「ドラマを見て韓国への憧れが募った」と述べているように、東亜大学の姜東完氏は、『韓流体験』が脱北

の触媒になって「とも指摘している」⁽⁶¹⁾。かつての米中の間の「ピンポン外交」のように、北の鎖国を開いていくには文化の力が絶大である。その意味で、二〇〇七年五月一九日に日本テレビより放映された『ZHO特別版「北朝鮮でロックする!!」』美少女バンド誕生の二四〇日間く」という番組のような斬新かつ勇氣ある試みは再び模索されていい。また、二〇一一年一月にサッカーW杯予選が平壤で開催されたことは、様々な問題を含んでいるとはいえ、今後につなげる一つの契機にすることは可能だろう。アンダーグラウンドにおける文化の侵入が、既存の文化に変化を与え、それが人々の意識と社会の変化を促し体制を突き崩す底流にならないとは限らない、韓国のような進展をみせるとはいえないが、現在の閉塞状況を打開する一つの可能性は秘めているといえよう。

この北朝鮮との関係も含めて、日韓は「二〇〇二年体制」ともいうべき、二〇〇二年当時の日本と朝鮮半島の関係性を想起することを提案したい。すなわち、「サッカーW杯日韓共催精神」を日韓関係の歴史的遺産として、≪ニコニコの関係の最初のモデル・ケースとして記憶する必要がある。まず、共催という方向で舵を取った関係者の

勇断はもつと評価されていい。共催があるからこそ、金大中は日本文化開放というタブーを乗り越えることができ、韓国代表サポーターも真剣勝負の日韓戦において、先述のような友好的な横断幕をかけることができた。共催がなければ、韓流もそれに続く日流も起きなかつたかもしれない。これは、譲歩・協力を通じたより大きな長期的利益・「共益」を生み出したモデル・ケースになり、文化（スポーツ）と政治・外交のリンクが成功した好例でもある。W杯で盛り上がった日韓関係の友好のダイナミズムは、同年九月一七日の小泉純一郎首相の電撃訪朝と「日朝平壤宣言」を生み出した。太陽政策、東アジア共同体といった新しい秩序を求める動きが、文化・スポーツと連動していた時期である。韓国のサポーターによる「広場文化」を含め、日韓両方とも輝いていた二〇〇二年のあり方は、今後の日韓両国の進むべき方向性を示しているのではないだろうか？

最後に、韓流は単なるエンターテインメント分野の過性のブームではなく、五〇〇年続いた西洋の世界支配の終焉という「ポスト・ヨーロッパ・ヘゲモニー」（ガバン・マコーマック）という壮大な観点から眺めることも

可能だ。胆略的に「東アジアの時代」の到来するとは思えない。世界はソーシャル・ネットワークも含めてより多元的かつネットワーク的方向へと推移していくだろう。韓流もそのような世界秩序の変動の流れの一環として捉える観点が必要だ。これまで反目していた国の文化を好きになるということは、それ自体で意味がある。また肯定と受容の力は社会に「愛」を育み、否定と排除の力は「憎悪」を生む。日韓の市民は、自らのような社会に住みたいのか考えて見る必要があるだろう。文化を通じてようやくお互いを隣人として相互発見できたことは、新しい時代を切り開く礎石となっている。

これまで日韓の相互認識は、他者を肯定することが自己否定につながるゼロサム的な「相互否定」のパラダイムであった。日韓の文化交流の深化は、文化の中のハイブリディティと越境性を確認する契機を与え、本質主義とナシヨナリズムを克服し、このパラダイムからの脱却を可能にしてくれるといえよう。

【注】

(1) 例えば、「少女時代と韓国成長企業」『日経ビジネス』オ

ンライン二〇一〇年九月二八日付。笠井伸幸・アジア経済研究所首席研究員は、(韓国)「『七原発建設発注について』、「先兵として韓流ドラマの輸出が大きく貢献した」と述べた。(Sankei Biz, 二〇一一年一月一六日。)

(2) 韓流と政治については、例えば、黄盛彬「日韓「文化と政治」とその構造」、徐勝・黄盛彬・庵途由香編『韓流』のうち外―韓国文化力と東アジアの融合反応』(御茶の水書房、二〇〇七年)、所収。

(3) 例えば、崔元植「韓流、東アジア疏通の道具」、毛利嘉孝「ポピュラー音楽の実践の中の文化的雑種」、前掲、『韓流』のうち外、所収。

(4) 小倉紀蔵『韓流インパクト―ルックコリアと日本の主体化』(講談社、二〇〇五年)、同『ハイブリッド化する日韓』(NTT出版、二〇一〇年)。

(5) 『朝日新聞』(二〇一一年二月六日付)は、二〇一一年の男子ゴルフ界を総括する記事で、韓国人のペ・サムムンがMVPと賞金王を獲得し、韓国勢が賞金ランク二〇位以内五人に含まれたことを報じながら、「韓流本流」という見出しをつけた。

(6) 日本における韓流の展開過程とその意義付けについては、例えば、拙著『韓流』と「日流」―文化から読み解く日韓新時代』(NHKブックス、二〇一〇年)第二章を

参照されたい。

- (7) NHKラジオ特集「日韓、交わることは、ひらける未来」
〜放送の舞台裏からPOPまで〜（二〇一一年一月二三日放送）、NHK BS特集「日韓ことばの最前線」（二〇一一年二月一〇日放映）。

- (8) 「めざましテレビ」(CX)（二〇一一年九月二日）。その中でキャスターの皆藤愛子は、自らも韓国に一人旅に行つて来たことを明かしている。筆者の大学生時代（九一年）ゼミで韓国合宿に行く際に、ある女子学生は祖母の反対によって、韓国行きを断念することもあったが、まさに隔世の感である。今では、祖母世代の方がより積極的に韓国旅行を望む場合も多いことだろう。

- (9) 「冬のソナタ」の主人公チェ・ジウと荒俣宏を起用して、韓国の世界遺産を紹介するNHKの特別番組『チェ・ジウ 日韓をつなぐ架け橋 韓国の歴史と世界遺産』は、内容も充実しており、新たな日韓の文化交流の断面を見せるものであるといえよう。

- (10) 「大久保コリアンタウン」については、例えば『毎日新聞』二〇一一年六月二三日、拙稿「ホットクと路地裏とかげそばの大久保物語」、『ニューズウィーク日本版』（二〇一一年七月一三日号）。

- (11) 『読売新聞』（二〇一一年四月二三日付）によれば、闇市

場を舞台に北朝鮮の密輸業者が中国で仕入れた韓国の商品などを販売し、「冬のソナタ」、「宮廷女官チャングムの誓い」、「ブラザーフード」などが売れ筋という。北朝鮮の若者の中には韓流スターに憧れ、髪の毛を伸ばして染めたり、「スキニー」タイプのズボンに改造したりする人もいるという。

- (12) <http://www.youtube.com/user/mbecondition?blend=21&pb=5>, <http://www.youtube.com/watch?v=eXh8RYFJoi0> 参照。

- (13) 『KBS 시사기획 신한류 길을 묻다』(KBS時事企画 新韓流の行方) 二〇一一年七月二二日放映。

- (14) 『東亜日報』二〇一一年二月七日。

- (15) 前掲『KBS 時事企画 新韓流の行方』。

- (16) 同上。

- (17) 『朝鮮日報』オンライン、二〇一一年七月八日。

- (18) ケネス・パイル著、加藤幹雄訳『日本への疑問』（サイマル出版会、一九九五年）。

- (19) その背景には、冷戦終焉後の国際環境に対する韓国人の危機意識が作用していた。冷戦は抑圧的な構造であったものの、逆説的に韓国の安全保障と経済成長が保障されるシステムでもあった。だが、その冷戦秩序の解体により、周辺の大国に囲まれた朝鮮半島では、列強が角逐を

繰り返された一〇〇年前と同じような状況が繰り返されるのではないかという不安が広がっていた。例えば一九九二年、日本の大国化に伴い「豊臣秀吉の朝鮮侵略四〇〇周年」が現実の危機意識とシンクロし、日本に対する敗北意識、脅威認識として表出することにもなった。「石油一滴も出ない」資源の乏しい韓国が経済危機に見舞われ、大国ひしめく東北アジアにおいて二一世紀に生きる道を「文化」に見出したのである。

(20) 『朝日新聞』一九九八年一〇月九日。

(21) ブルー・カミングス著、横田安司・小林知子訳『現代朝鮮の歴史』（明石書店、二〇〇三年）。

(22) 韓国では語学留学やバックパック旅行、大学の調査旅行など様々な形態で、実に多く若者が世界を体験している。かつては、欧米や日本に憧れの念を抱く場合が多かったが、大学生に対する聞き取りによると、近年は必ずしもそうではなく、韓国と「世界」の距離をさほど感じないと答える学生が増えた。例えば、ソウル大学のある学生は、パリの華麗な文化遺産を目の当たりにしても別に圧倒されることもなく、これらはいくまで「過去」の栄光であり遺産であって、インターネット環境の不十分さや生活の便利さと質など、今の時代の比較では、逆に韓国の方が優れた点が多いということを確認したという。

(23) 『東亜日報』オンライン、二〇一一年九月三〇日、<http://news.donga.com/Culture/New/3/07/20110930/40749237/1>。

(24) 韓流を朝鮮半島の「分断体制」との関連で注目している議論として、例えば、白楽晴「朝鮮半島の統一時代と日韓関係」、前掲『韓流』の「うち外」所収。

(25) ガバン・マコーマック著、松居弘道・松村博訳『空虚な樂園―戦後日本の再検討』（みすず書房、一九九八年）。

(26) キム・チャンナム『대중문화의 이해(大衆文化の理解)』（ハヌルアカデミー、二〇〇九年）。

(27) 論者の中には、東アジア国際関係の「正常化」をかつての中華秩序に準拠して論じる場合があるが、筆者は、今の東アジアは国家、市場、市民社会、サイバー空間など多元的なアクターによつて構成され、そこに「文化」の交錯が見られるという意味で、伝統的中華秩序とはまったく性格のことなる新しい東アジア国際秩序が誕生しつつあると考える立場に立つ。よつて、ここでいう「正常化」とは過去を準拠におくものではなく、まったく新しい多元的で水平志向的でネットワーク的な東アジア秩序であると考ええる。

(28) 小倉紀蔵、前掲『韓流インパクト』参照。

(29) 『週刊朝日』二〇〇八年五月二日号。

- (30) 『ニューズウィーク日本版』二〇一一年九月二一日号。
 筆者の金溶徳所長に対する聞きとりによる。
- (31) 『読売新聞』二〇一一年一月二二日。
- (32) 日韓関係の構造的変化については、例えば、木宮正史「日韓関係の力学と展望―冷戦期のダイナミズムと脱冷戦期における構造変容」金慶珠・李元徳編『日韓の共通認識』(東海大学出版会、二〇〇七年)。
- (33) 『読売新聞』二〇一一年一月三〇日。
- (34) www.mofa.go.jp/mofaj/
- (35) 『読売新聞』二〇一一年一月三〇日。
- (36) www.asahi.com/politics/jiji/JJT20111006102.html。
- (37) 『国民日報』オンライン、二〇一〇年一〇月一四日。
- (38) 楽曲の内容とその時の状況、位置づけについては、拙稿「スナイパー×教授のコラボに震えた夜」『ニューズウィーク日本版』二〇〇四年六月二六日号。
- (39) 『ハンギョレ新聞』オンライン、二〇〇九年五月一五日。
- (40) 韓国における「日流」については、前掲拙著、第二部、大野俊編『メディア文化と相互イメージ形成―日中韓の新たな課題』(九州大学出版会、二〇一〇年)第一章、第四章、第五章参照。
- (41) 『ZEN STYLE(禅スタイル)』という表現は、インテリアなご日本の「和」のテイストを表す表現として、高級なイメージとして定着している。
- (42) 二〇〇九年のSBSドラマ『シティ・ホール』において主演のチャ・スンウオンのスタイルや雰囲気が大人気になった際に、「チャ・スンウオンのような感じ・雰囲気」という意味で「차간지(チャガンジ)」という表現が流行語になった。その後は、俳優のソ・ジソプに対しても使われ、「소간지(ソガンジ)」と呼ばれている。「感じ/雰囲気のある男」という意味で「간지남(カンジナム)」という表現もある。
- (43) 韓国の進歩系インターネット新聞である『단지일보(タンジ日報)』(www.ddanzi.com)の代表・キム・オジュン人は日本人に対して寛容になったと指摘した。(『タンジ日報』二〇〇五年七月二八日)
- (44) その意味で、日本の「カワイイ」を基にしたアイドル文化を完璧に内面化した「AKB」が誕生し、「Bo Peep Bo Peep」というタイトルで、日本でも話題の「猫ダンス」を披露したことは、韓国文化シーンにおける種の衝撃であり、対日コンプレックス克服を象徴する一例といえる。
- (45) 『韓流バブルがはじける日』『ニューズウィーク日本版』二〇一一年九月二一日号。
- (46) 筆者と古家氏の対談の際のコメントである。

(47) 筆者の聞きとりによる。

(48) 確かに、韓国のニュースにおいて、ある重要な出来事について、海外の反応を紹介する際に、従来は一番目はアメリカで二番目は日本であった。だが、近年は二番目に中国を紹介し、日本は三番目になるケースが増えている。だが、それは日本においても事情はあまり変わらず、韓国が報じられないケースもあることに鑑みれば、順番はともかく、まだ紹介されている点に重きを置いていいかもしれない。

(49) 例えば、二〇一一年に韓国で話題となった実力派歌手の競演番組である「나는 가수다 (ナヌン・ガスダ、私は歌手だ)」やそのメンバーでもあった、パク・ジョンヒョン (LENA PARK)、イム・ジェボム、イ・ソラ、インス「Bobby Kim」などの実力派アーティストや、Leessang、Dynamic Duo、Drunken Tiger、チャン・ギハなど独特の世界観を表現している今の韓国の「元氣な」若者、そして「ホンデ」のインディーズ・アーティストなどが、もっと紹介されることの方が、より健全で成熟した日韓の文化交流につながるという。また、日本の中島みゆき、井上陽水、浜田省吾、ミスター・チルドレン (BANK BAN D)、斉藤和義などがきちんと紹介されるならば、韓国人のJ-POPに対するイメージも変わるのではないだろうか。

さらに、「サラリーマンNEO」(NHK)、「ハゲタカ」(NHK)などのドラマや番組も、共通の社会構造を持つ日韓では共感を得られやすいだろう。ちなみに、「私は歌手だ」については、拙稿「アイドルだけじゃない韓国の「ホンモノ」回帰」『ニューズウィーク日本版』二〇一一年一月一九日号、参照。

(50) 韓国文化院ホームページ。http://www.koreanculture.jp/info/news/view.php?number=1636。李箱文学賞受賞作である、ハン・ガン著、きむふな訳『菜食主義者』が課題図書に選定された。

(51) 韓国のデジタル・デモクラシーについては、玄武岩『韓国のデジタル・デモクラシー』(筑摩書房、二〇〇五年)。
(52) 『ハンギョレ21』二〇〇五年一月一七日、第五八五号。
(53) 同上。

(54) 『ハンギョレ新聞』オンライン、二〇〇七年七月三〇日。
尚、二〇〇五年には明成皇后殺害の実行犯の子孫もこの団体と共に訪韓している。

(55) 『ハンギョレ新聞』オンライン、二〇〇七年三月五日。
(56) 『韓国日報』オンライン、二〇〇九年二月二十四日。
(57) Gilbert Rozman, *Northeast Asia's Stunted Regionalism: Bilateral Distrust in the Shadow of Globalization*, Cambridge University Press, 2004, Chapter 3.

(58) 太平洋から「日本海」へと目を転ぜよという主張としては、例えば、寺島実郎「真の東アジアの提携にむけて」前掲『「韓流」のうち外』所収)。

(59) 「ルック・ウエスト政策」と「西京」としての福岡については、拙稿「アジアの中心「西京」を東京人もルック・ウエスト！」『ニューズウィーク日本版』二〇〇八年七月一六日号。

(60) 『読売新聞』二〇一一年三月三〇日。また麻生知事は北部九州の五つの拠点として研究開発、知的集積などの拠点化、自動車、ロボット、バイオ、水素、半導体などの産業拠点、中小企業の市場開拓に向けたアジアビジネスの拠点、公害克服技術などを生かした環境産業の拠点化、アジアで起きている新しい共通文化を積極的に振興するなどを掲げた。

(61) 『読売新聞』二〇一一年四月二三日。

【付記】

本稿は、東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター、駐日大韓民国大使館共催フォーラム『共生協力の韓日関係企画フォーラム―韓日市民社会・文化の交流の観点から』（二〇一一年一〇月二一日）における報告「日韓の文化交流とその外交的含意」と、韓国人研究者フォーラム、駐日

韓国大使館韓国文化院、韓国コンテンツ振興院共催のシンポジウム『韓国と日本における文化交流の新しい流れを考える―韓流の現状とトランスナショナルな文化交流』（二〇一一年九月二九日）における報告「日韓関係の多元化と韓流」という、二つの報告を基に加筆修正したものである。この場を借りて、報告の機会を与えてくれた主催の各機関に心より感謝申し上げたい。また、討論および司会をご担当いただいた、東京大学の木宮正史先生、園田茂人先生、立教大学の李鐘元先生、李香鎮先生、黄盛彬先生、聖公会大学の梁起豪先生などからとても有意義かつ建設的なコメントをいただいた。今回の論稿ではそれらをきちんと反映することはできなかったが、今後の課題にさせていただきたい。尚、現在進行形の文化現象を扱っている報告でもあり、一般市民向けの報告でもあったため、学術的とはいえないレトリックな表現も多用しているが、「伝える」ことに重きを置いたためできるだけ口頭での表現を残した形となった。ご理解いただければ幸いである。